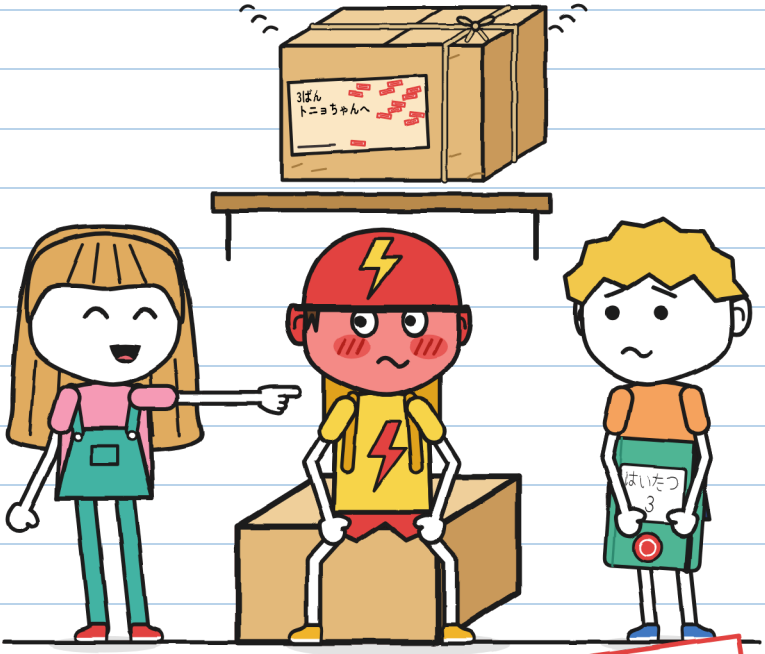
ありえない はいたつ・3

へんそう おねがい

LinguAula



(グニの ノート)

サイズ M
中級・9+

ありえない はいたつ・3
へんそう おねがい

文と絵：LinguAula

サイズ M・中級・9+

日本語版：LinguAula

初版：2026

© 2026 LinguAula · info@linguaula.com

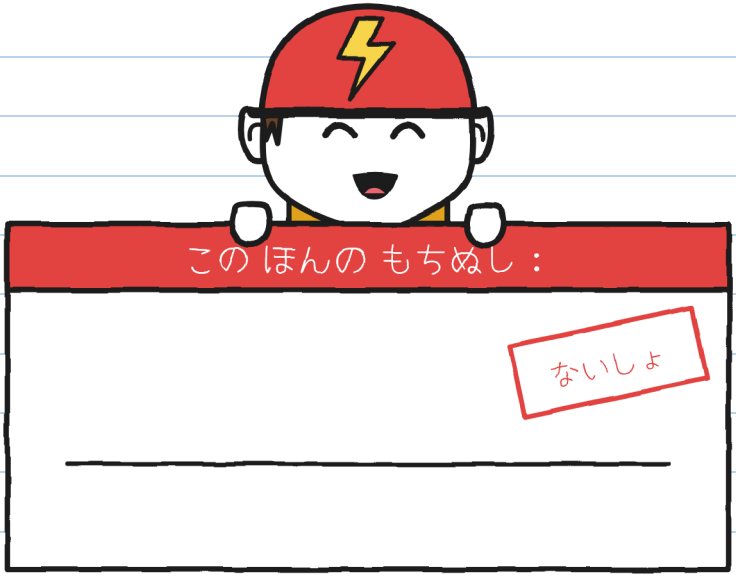
自由にコピーして、学校でも家でも使えます。

シリーズ第3作。前の2作：『このにもつは かみつく』『かみなり前に あけるな』

LinguAula

linguaula.comで しょうごとに れんしゅう

この本を書いているあいだ、ケガをした配達員はいない。まっ赤になった人は、いる。 —J.



そして さきに よむのは わたし。 —J.

見(み)つけたら、もどしてください。おねがいします。

おはなしの なかだけ

このはんこ(にもつ)は、おはなしの中(なか)だけで起(お)こることのしるし(ほんもの)。本物(じてんしゃ)の荷物は飛んでもどったりしない。本物(ほんもの)の自転車に乗るときは、76ページのとおりに。 —J.

だれが だれ？



グニ。どようびの はいたつやさん。だれも たのんで いない ものを かく。この ノートは グニの。



フリータ。みどりで かいて、「J.」と サインする。いつも たすけかたを しって いる。それが もんだい。



トニョ。じてんしゃで イナズマびんの はいたつを する。じっぷんで とどかなければ タダ。あかく なるのは ぶぶんごと。



マラさん。「ありえない はいたつ」の てんしゅ。まじょの ぼうしを かぶって いる。いうより ずっと おおくを しって いる。



ゾーイ。イナズマびんの 人。いちばん はやい。あだなを つける人。



ブルーノ。イナズマびんの 人。1かい パンクした。2ねん まえ。



3ばんの にもつ。うごかすと なる。ラベルには なまえが ひとつだけ。

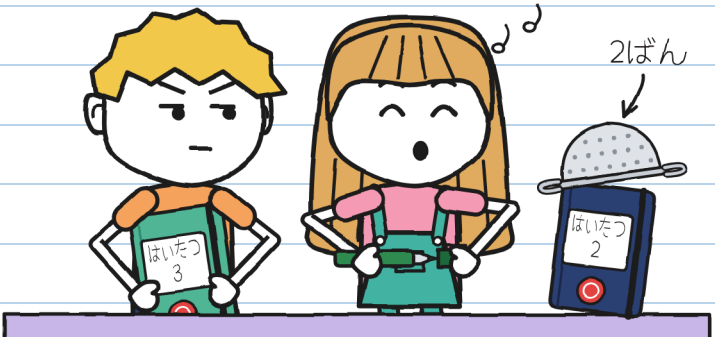


R.は、だれにも とどけられない にもつを おくるひと。その なまえを だれも いわない。

グニの
はいたつノート3

ないしょ。

「ないしょ」は、先に読むこと。だれにも言わない。 —J.



ノート2は、たった一つのあらしで使いきった。これは緑色で、店のはんこ入り。ぼくが最初に使うはずだったのに、使ったのはフリータだった。

助けるために先に使ったの。どういたしまして。 —J.

ぼくはたのんでいない。でも、フリータには関係ない。

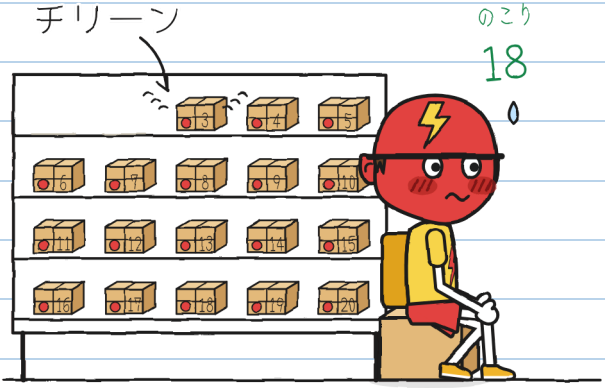
第1章

チリーン

マラさんの店には、だれにもとどけられなかった荷物のたながある。二十こあった。フリータとぼくは、ドラゴンのたまごと走るたねをとどけた。のこりは十八こ。

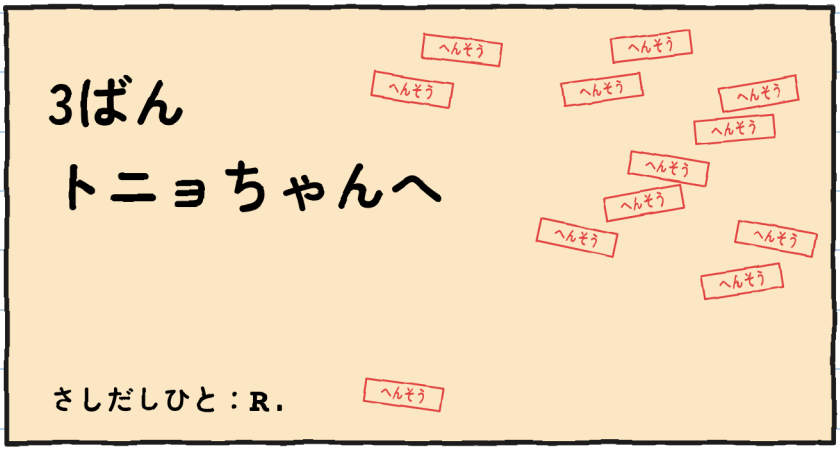
あらしの夜、もううちへ帰ろうとしていたとき、荷物の一つが鳴った。

チリーン。



3番だった。十分でとどかなければタダのイナズマ便で働くトニョが、ヘルメットと同じ色になった。

サインがないと、もどってきた荷物は夜明けにたなへ飛んでもどる。サインとして使えるのは、荷物を受けとる人のものだけ。ラベルに、きえないインクで書く。R.は差出人、つまり荷物をおくる人だ。



フリータはラベルを読みはじめた：
「トニョちゃ……」
フリータは口をとじた。フリータは、ことばのとちゅうでだまったりしない。トニョを見ると、赤くなりかけていた。

半分だけ読んだ。あとの半分は飲みこんだ。 —J.

いきなりまっ赤になる人もいる。トニョはちがう。トニョは部分ごとに赤くなる。ぼくは書きとめた。

トニョの あかメーター



「その荷物は、まてる」とトニョはものすごい早口で言った。「何年もまってるんだろ？　じゃあ、あと一日。十日でもいい。イナズマ便はいそがない」

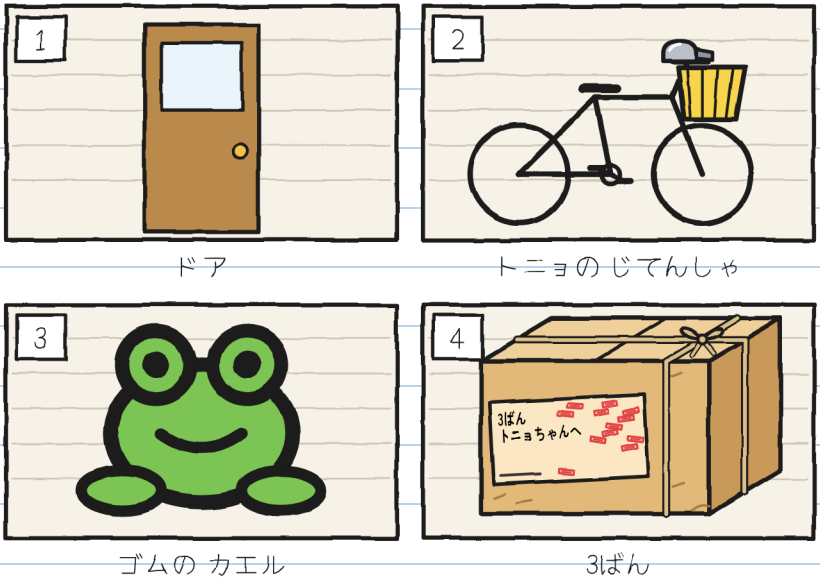
イナズマ便の人がそんなことを言うのを聞いたのは、はじめてだった。

その夜：4。赤で書きたいところだけど、持っているのは緑だけ。　—J.

「今夜は何も開けない」とマラさんは言った。「それに、たなには勝手にさわらない」
だれもさわらなかった。チリーンは、また鳴った。
チリーン。
「今の、ドアの音だよ！」とフリータは言った。

わからないことがあると、ぼくはリストを作る。

チリーンの ようぎしゃ



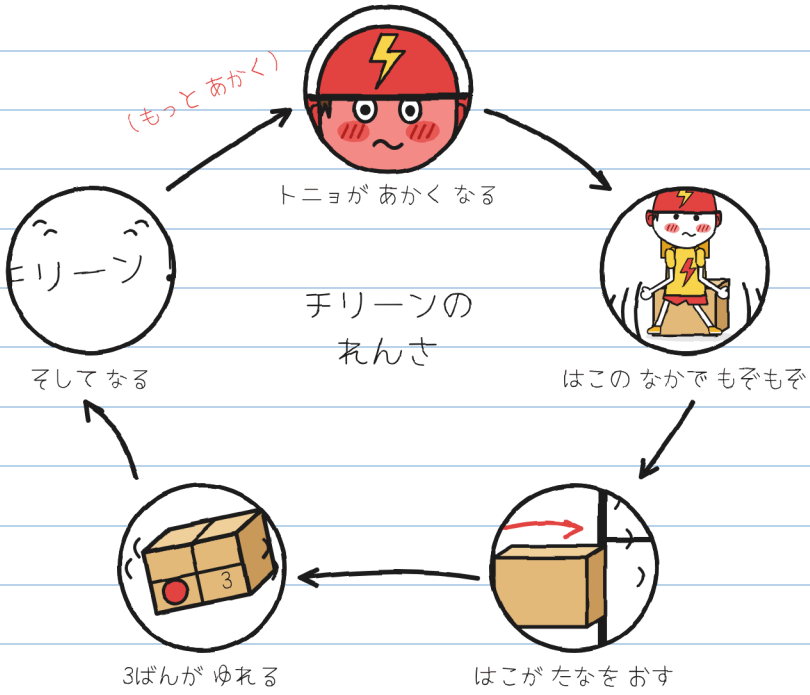
カエルは悪くない。わたし、知ってるから。 —J.

ぼくは歩道に出て、音をためした。もう雨はふっていない。
ドアを開けてしめた：ギィー。トニョの自転車のベルをならした：リンリン！　カエルをおした：キュッ。



中では、フリータが指をふって「ちがう」と言っていた。どの音も、同じじゃなかった。
ぼくは入った。トニョが箱にすわったまま、もぞもぞ動いた。
チリーン。

ぼくはしゃがんだ。トニョの箱が、たなの足にもたれかかっていた。



まほうじゃない。トニョだった。
3番を動かすと、中で何かが鳴る。

わたしと同じ。 —J.

トニョはじっとしていることに決めた。それがもったのは、これだけだ：

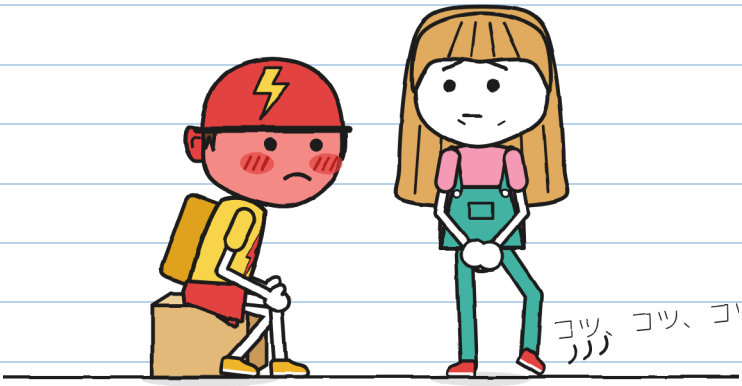


ただ聞いただけ。聞いただけで、たなはおせない。 —J.

この一言は、おした。

「ぼくのことだ」とトニョは、自分のスニーカーを見ながら言った。「小さいころの」
あまり小さい声だったので、カエルのほうがぼくよりよく聞こえたはずだ。

フリータは口を開けた。聞きたいことがたくさんあった。トニョはまだ自分のスニーカーを見ている。それを見て、フリータは口をとじた。



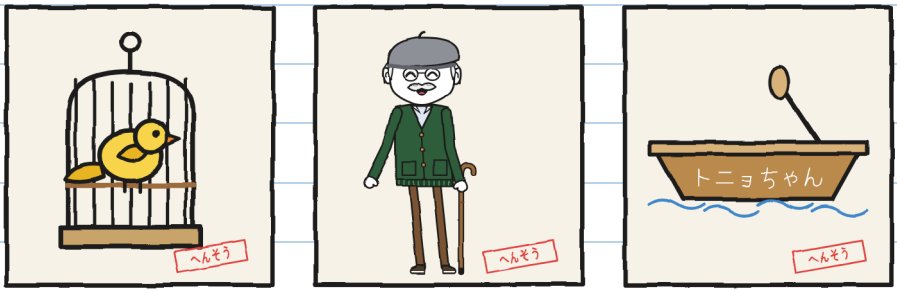
「もうきかない」とフリータは言った。
がまんするのは大変だった。足に出ていた。

聞かなかったことは九こ。ぜんぶ書きとめてある。 ーJ.

「どうして一度もとどけなかったの？」とぼくはマラさんに聞いた。

「十二回持っていったよ。ラベルを見てごらん。通りの名前も、番地も、名字もない。見つけたトニョちゃんは、ぜんぶ試した」

マラさんの トニョちゃんたち



1. カナリア。
（ラベルを ふんだ。ダメ。）

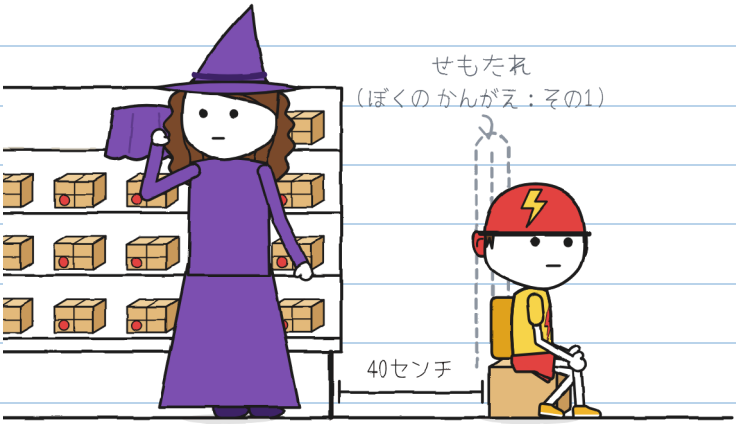
2. アントニオさん、71さい。
（「そうだと いいんだけどね」）

3. うんがの ボート。
（てが ない。）

「トニョは？」とフリータが聞いた。

「この前とどけようとしたときは、まだトニョを知らなかった」とマラさんは言って、トニョを見た。「それに、小さいころなんとよばれていたのか、だれも教えてくれなかった」

マラさんはカウンターの下からむらさき色のぬのを出して、3番にかけた。ねむるときのオウムのかごみたいに。
それから、トニョの箱をたなから40センチはなした。
「これでいい。いくら動いてもだいじょうぶ」



トニョは自転車で帰れた。ドアのところにある。10分で町の反対まで行ける。
トニョはまたすわった。
なぜかはわからない。でも書いておく。トニョの箱にはせもたれがないから、ぼくが一つかいた。

だれもあなたに、せもたれなんてたのんでいない。 —J.

店をしめるとき、トニョは最後までのこって、ヘルメットをとめていた。
「マラさん。あした、あの荷物のことで話しに来る。ほかの人に聞かれない所で」
「この二人は店の人だよ」
トニョはぼくたちを見た。
「この二人ならいい。でも、イナズマ便の人はだめだ」



チリーンの持ち主は、もうわかった。トニョだ。あとは、トニョが荷物をほしいかどうかだ。

どうすれば助けられるか、わたしにはもうわかっている。 —J.

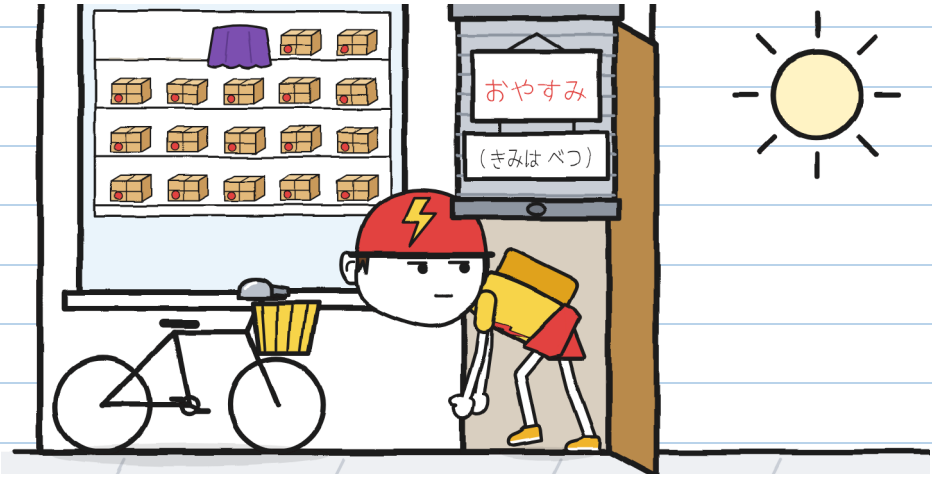
それがぼくは心配なんだ。

第 2 章

いいとは いって ない

日曜日は店が休みだ。マラさんはシャッターを半分だけあげて、はりがみをした：おやすみ（きみはべつ）。

トニョは十一時に来た。入る前に道の左右を見た。道をわたるときのように。イナズマ便の人は、だれも来ない。



わたしたちは十時半に来た。念のためにね。 —J.

マラさんは3番をカウンターにおいて、ぬのをとった。はりがみを読むような調子で言った：

「3番の荷物。トニョちゃんあて。あなたのこと？」

「ぼくのことだった」

「それでいい。ほしい？」

トニョは箱を見た。箱はなにも言わない。

「いいとは言ってない」

「いやだとも言ってない」

「いいとは言ってない、と言ったんだ」



サインしないためのセリフが三つ。数えたよ。 —J.

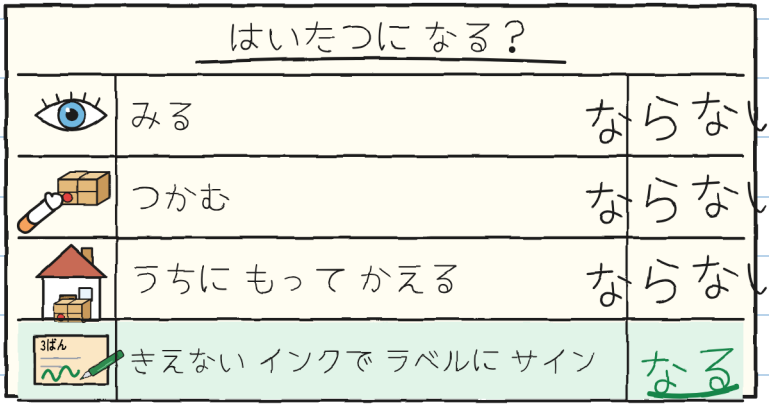
トニョは箱を、やけどしそうな小なべを持つようにつかんだ。重さをたしかめ、まわし、耳に近づけて、そっとゆらした。

チリーン。

トニョはあわててはなした。

「もしトニョが荷物を家に持って帰ったら？」とフリータは言った。「荷物がトニョの家でねたら、もうとどいたことになる。りくつだよ」

「へんそうのはんこは、りくつじゃ決まらない」とマラさんは言った。「インクで決まる」

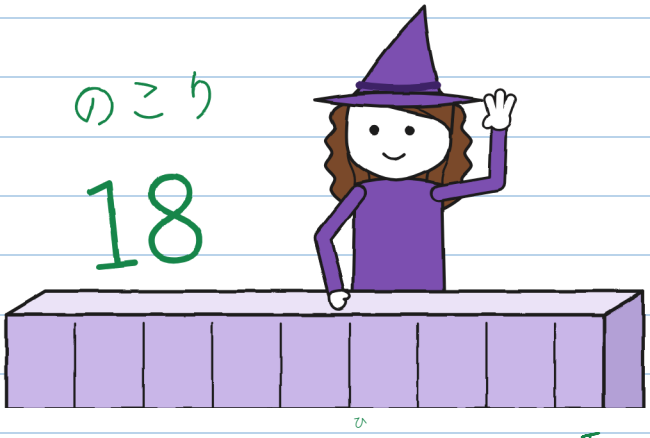


はんことわたしは、考えがちがう。 —J.

「この配達はあなたたちのもの」とマラさんは言った。
「かみなりのときと同じ。ただし、じょうけんが三つ」
マラさんは指でかぞえた：

1. あなたたちは箱を開けない。ラベルもはったまま。
2. 3番が店から出るのは、トニョがたのんだときだけ。
3. うけとる人は、したければサインする。サインがなければ、夜明けに荷物はもどる。ここでは何も起きなかったことになる。

「もしトニョがずっとほしがらなかったら？」とフリータが聞いた。
「じゃあ、ずっとそのままだ」



「ずっとそのまま」は、とどける日じゃない。 —J.

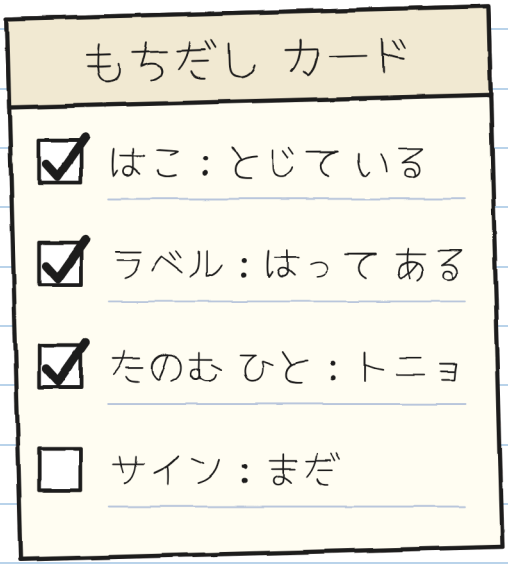
トニョは長いあいだだまっていた。フリータが時間をはかった：四分。イナズマ便なら、配達のほぼ半分。

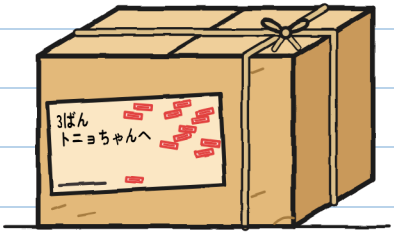
「持って帰る」とトニョはやっと言った。「とじたまま。考えるために。いまのところは」

「あなたがたのむのね？」とマラさんが聞いた。

「ぼくがたのむ」

3番がどんなふうに出ていったかを書いた。だれにも、ちがうと言わせないように：





外で、トニョは3番を自転車のかごに入れた。手をはなすと、鳴った：チリーン。

ハンドルの、イナズマ便のベルがついている所を見つめていた。何かを思いだしたようだった。
「どうしたの？」とフリータが聞いた。
「なんでもない」
トニョは自転車を手でおして、歩いて帰っていった。トニョは、ふだんぜったいに歩かない。



あの「なんでもない」は、「何かある」ってことだよ。助けなきゃ。 —J.

ドアのところから、角にイナズマ便の自転車が二台とまっているのが見えた。
「トニョ！　かごに何が入ってるの？」と、こしまでとどくおさげの女の子がさけんだ。
「配達だ」
「だれあて？」
「お客さんあて」

うそはついていない。答える前に箱をまわした。ラベルを自分のほうにむけて。イナズマ便の人には読めなかった。



「イナズマ便の人はだめ」の意味が、やっとわかった。　—J.

その夜、ぼくは部屋のブラインドをあげたままにしておいた。うちは店の向かいだ。3番がもどってくるなら、ぼくに見えるはずだ。

「グニ？」とお母さんがろうかから言った。「起きて何してるの？」
「荷物を見はってるんだ」
「ああ、そう。でもパジャマを着て見はりなさい」



わたしも見はりたかった。わたしの部屋のまどは中庭に向いている。 —J.

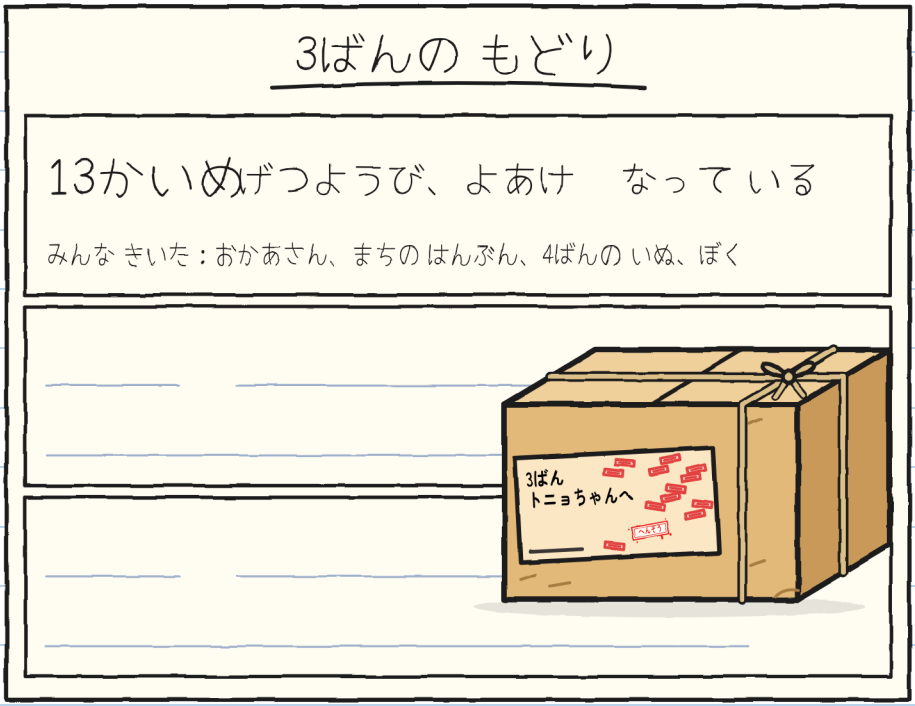
夜明けに、3番は見えるより先に音が聞こえた。

チリーン、チリーン、チリーン。

屋根の上をゆっくりやってくる。アイスクリームの車みたいな音だ。三つのまどに明かりがついた。犬がほえた。3番は、ドアの上の小さなまどから入った。マラさんがそのためにいつも開けておくまどだ。



学校のあと、店に行った。3番はたなの元の場所にもどっていた。はんこがひとつふえて、十三になっていた。



「ばつじゃない」とマラさんは言った。「きまりだ。だれもサインしていないから、もどる」

はんこが十三こ。このままだと、箱が見えなくなる。 —J.

トニョは五時二十分に、配達が終わってからやってきた。3番がもどったかどうかは、聞かなかった。その朝、3番が家の上を通るのを聞いていたからだ。

これは、ぼくは見ていない。トニョが話してくれた：

トニョが はなして くれた こと



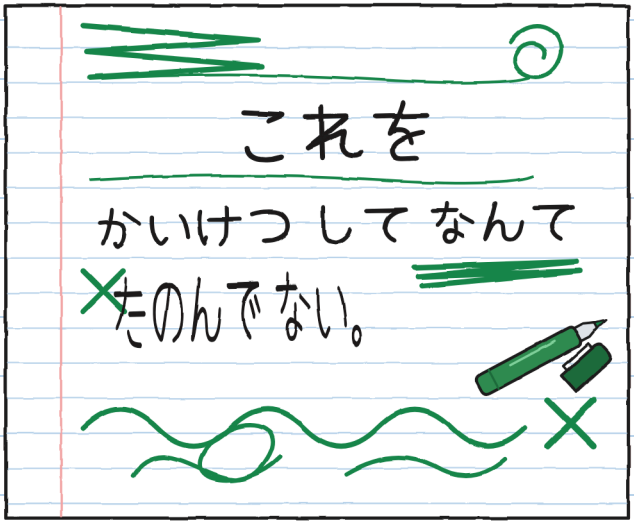
「げんかんマットにおいた。ひとばんじゅう」

「どうして家の中に入れなかったの？」とフリータが聞いた。

「うちには、ぼくをそうよぶ人がもう十分いるから」

「サインひとつで、ぜんぶかいけつするんだよ」とフリータは、トニョが帰ったあとで言った。「たったひとつ。二秒ですむ。自分のサインではかってみた」

ぼくはノートを開いた。「みどりの字でも、ぼくの言葉はかくせない」と思った。ボールペンで、強くおして書いた：



読んだよ。さんせいできない。いまのところは。 —J.

別の考えがある。そんな目で見ないで。 —J.

第 3 章

サイン

火曜日、学校から帰ると、店の前の歩道につくえが出ていた。黄色いテーブルクロスが地面までたれ、フリータの字で書いたはりがみがあった。まん中には、クロスの下にかくれたふくらみがあった。



「サイン台だよ。サインしやすくするための台」とフリータは言った。「わたし、サインを集めてるの」

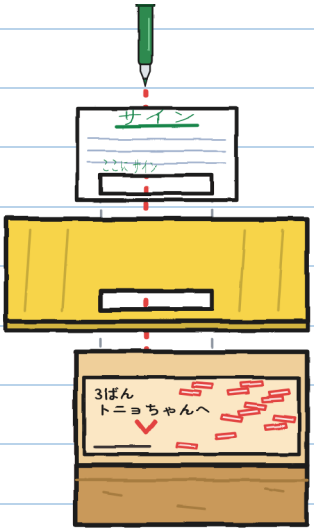
「いつからサインを集めてるんだ？」

「きのうから」

サイン台の上に、せんのある紙があった。下に、はさみで切った小さなまどがある。テーブルクロスにも同じまどが、ちょうどその下にあった。
ぼくはテーブルクロスのすみを持ちあげた。サイン台は、ねかせた3番だった。まどから、上を向いたラベルが見えた。

しくみ

1. ちいさな まどの ある かみ。
2. あなの あいた テーブルクロス。

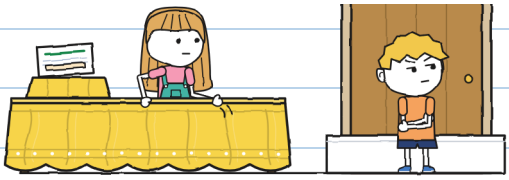


3. 3ばんの ラベルの、しろい ところ。
4. まどに サインした ひとは…… ラベルに サイン。

「わたしのペンで」とフリータは、うれしそうにささやいた。「きえないインクだよ。あした3番はもどらない。トニョは、荷物を見せたときに知るの。サプライズ！」

「トニョは、3番を店から出してほしいとはたのんでいない。じょうけん2だ」とぼくは言った。
「あとでありがたがるよ」
「マラさんは？」
「電話ちゅうだった。「サインのつくえ」って言った。ほんとうにそうだし」
「サイン台は？」
「それは聞かれなかった」

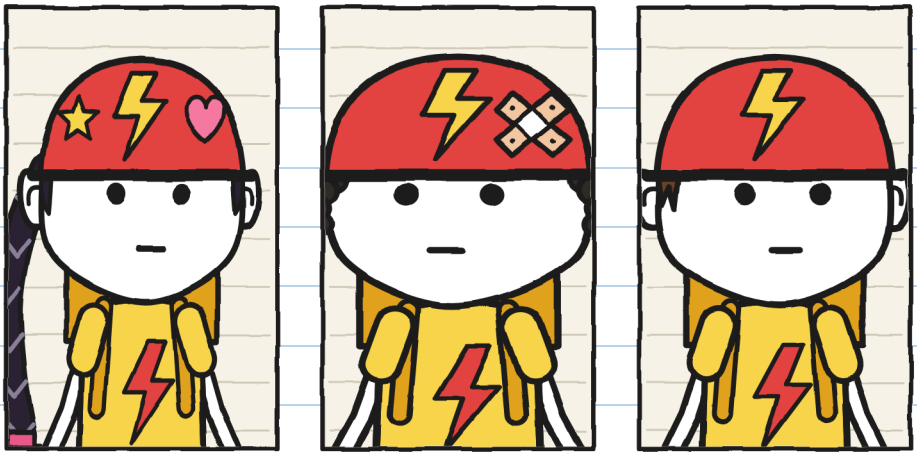
ぼくはフローラと八つめのたねのことを思いださせた。フリータはフローラに、早すぎるサインをさせなかった。
「同じじゃない。あの配達は、まだとちゅうだった。これは近道だよ」
「じゃあ、きみがやれば。ぼくはしない」



入口のだんにすわった。きりっとした顔で。まったく助けにならない。 —J.

イナズマ便は五時十分に、ぼくたちの通りをとおる。
三人が一列になって。

イナズマびんの カード



ゾーイ、「ロケット」：
いちばん はやい。
あだなを つける。

ブルーノ、「パンク」：
1かい パンクした。
2ねん まえ。

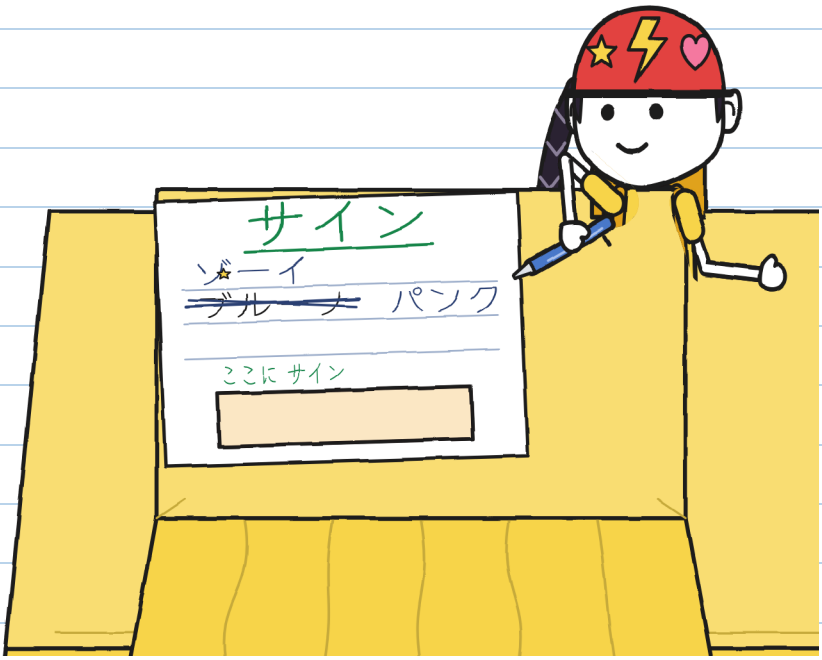
トニョ：
あだなは ない。
まだ。

「サイン？　わたしたちの？」とゾーイは言った。ブレーキをかけて、自転車からおりた。

あの人たちにサインをたのんだ人はいない。だからうまくいく。 —J.

ゾーイが最初にサインした。名前のまん中に星を一つつけて。ブルーノは「ブルーノ」と書いた。ゾーイはそれを消して「パンク」と書いた。

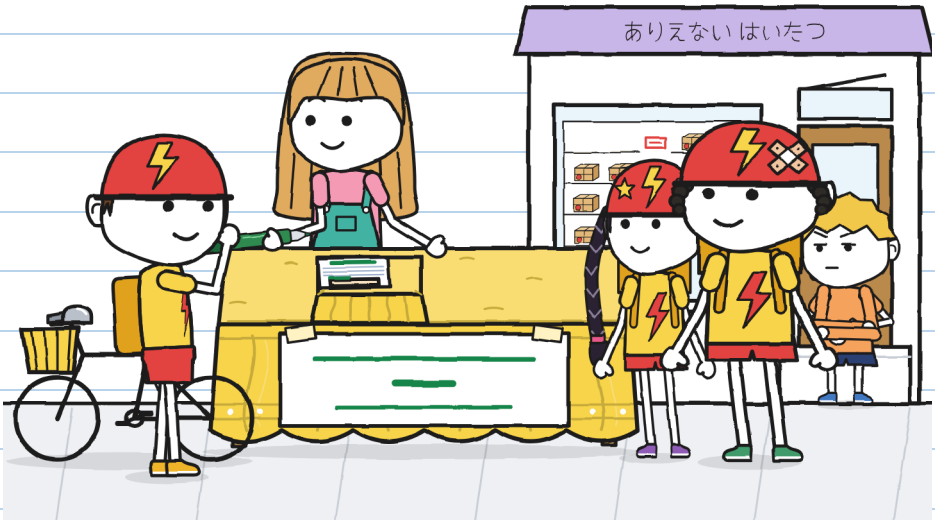
「イナズマ便では、あだなは取れないんだ」とブルーノは、おこりもせずにぼくに教えてくれた。「一度パンクしたからね」



トニョはまだ自転車に乗っていた。日曜日に3番を見たときと同じ目つきで、つくえを見ていた。

「つぎはトニョの番」とフリータは言った。「ここの下の、わくの中。いちばん大切な場所だよ」
みどりのペンをわたした。

トニョがサインをたのまれたのは、はじめてだった。
自転車から下りて、せすじをのばした。



入口のだんから全部見えた。「ぼくには関係ない」と思っていた。そして、だまっていた。

ぼくは立ちあがった。

「トニョ、ま……」

おそかった。トニョはサインするために、サイン台をぐいとひきよせた。テーブルクロスの下で、ぼくの注意より先に何かが鳴った：



トニョはテーブルクロスをもちあげた。



「ト・ニョ・ちゃ・ん・へ」とゾーイは、ごほうびでも発表(はっぴょう)するみたいに、ゆっくり読(よ)んだ。

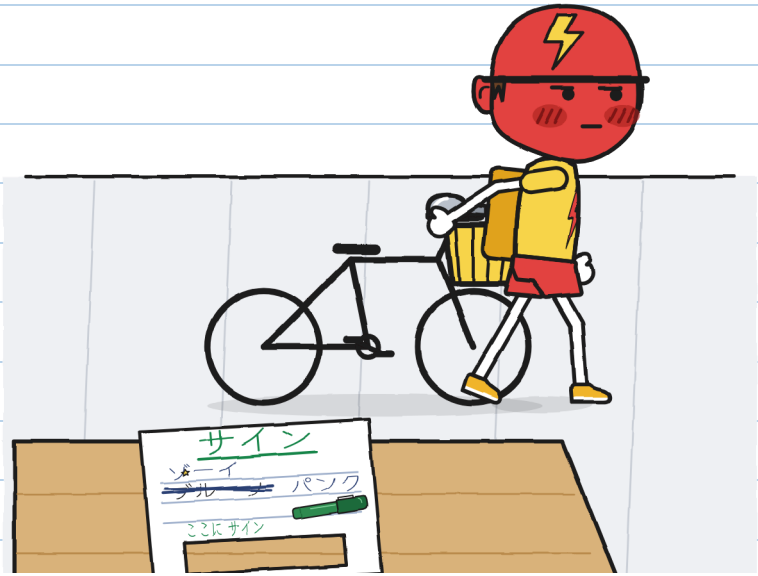
「トニョちゃん？」とブルーノは言(い)って、笑(わら)った。

ゾーイは笑(わら)わなかった。ゾーイは考(かんが)えていた。

トニョはどならなかった。ゆっくりペンにキャップをして、紙の上においた。サインはしないまま。

「イナズマ便はわなにサインしない」

自転車のハンドルをつかんで、歩いて行った。だれもあとを追わなかった。



ヘルメットの色になっていた。でも、はずかしさの赤ではなかった。おこりの赤だった。

あかメーターには、その赤の番号がない。 —J.

マラさんはむらさき色のぬのを持って出てきた。だれが荷物を持ちだしたか、聞かなかった。たなのあいた所、つくえ、フリータを順に見た。

マラさんは3番にぬのをかけて、だきあげた。

「この荷物はとどいていない」とゾーイとブルーノに言った。「それに、ラベルになんと書いてあっても、それはトニョの問題だ」



ベルもならさずに行ってしまった。

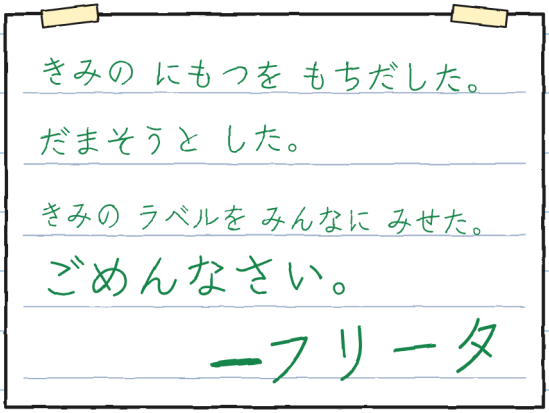
ぼくはフリータが、テーブルクロスとはりがみとサインが二つとあなのあいた紙をかたづけるのを手伝った。
「言ったとおりだろ」とは言わなかった。「たいしたことない」とも言わなかった。たいしたことだったから。
「あなたは何もしてない」とフリータは言った。
「知らせるのがおそかった。もっと早く言えたのに。マラさんをよべたのに」



それからフリータは中に入って、一人でマラさんに全部話した。小さなまどのこと、テーブルクロスのこと、たなのこと、電話のこと。
「トニョには」とマラさんは言った。「あなたが話しなさい」

水曜日、トニョは五時十分に、ブレーキもかけずに通りすぎた。五時二十分にも、また通った。三回目には、フリータが歩道のまん中で紙を持って立っていた。

おわび



トニョは自転車に乗ったまま紙を読んだ。

「わかった。読んだ」

「ゆるしてくれる？」

「読んだって言った」

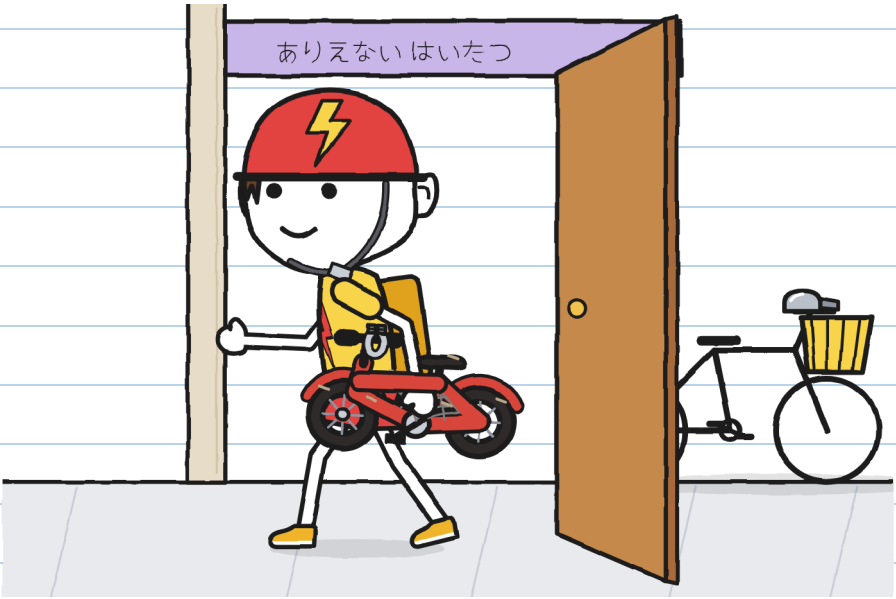
その夕方、トニョは店に来なかった。トニョの箱は空っぽだった。

名前を全部書いてサインした。それくらいはしないと。 ーJ.

第 4 章

ちいさな じてんしゃ

木曜日、トニョは道の左右も見ずに店に入ってきた。自転車をわきにかかえていた。



今のじゃない。いや、トニョのだ。小さいころの。

「日曜日からずっと、頭の中でチリーンが鳴っているんだ」とトニョは言った。「あの音に聞きおぼえがある気がする。ほんとうにそうか、たしかめたい」

「荷物をあけたい。ここじゃない。ショーウィンドウのない所で」

マラさんはぼくたちを店のおくの部屋につれていった。

「見るためにあけるのは、サインじゃない」とマラさんは言った。「サインがなければ、夜明けにもどる」



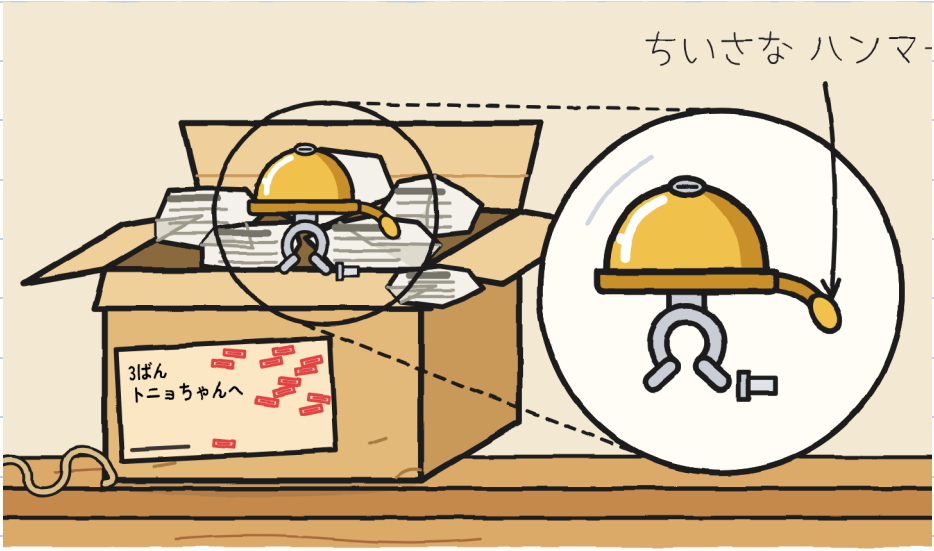
「いてもいい？」とフリータは聞いた。ちゃんと聞いたのだ。

トニョはしばらく考えた。

「何もさわらないなら」

「箱にも、その話にも、さわらない」

トニョはひもをほどいた。中には古い新聞紙が入っていて、ひとりでにやぶれそうなほどだった。そして、紙のあいだに……

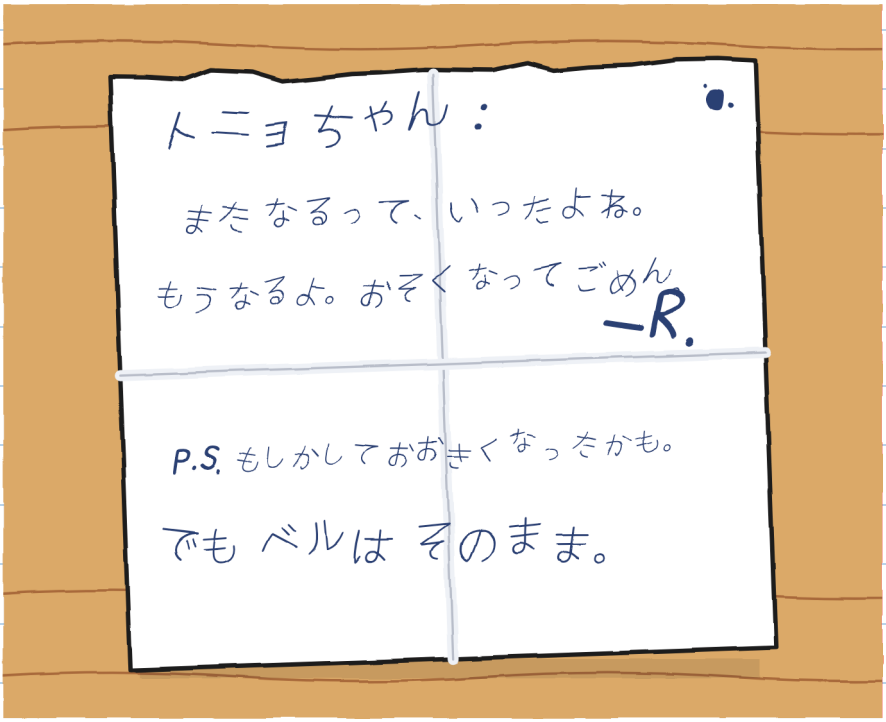


自転車の小さなベル。金色で、ばねにつながった小さなハンマーがついている。ゆらすだけで鳴る。

1番はかみついた。2番は走った。3番はただ鳴るだけ。

ドラゴンも足もない。ベルがひとつ。気に入った。 —J.

その下に、四つにおりたたんだメモがあった。

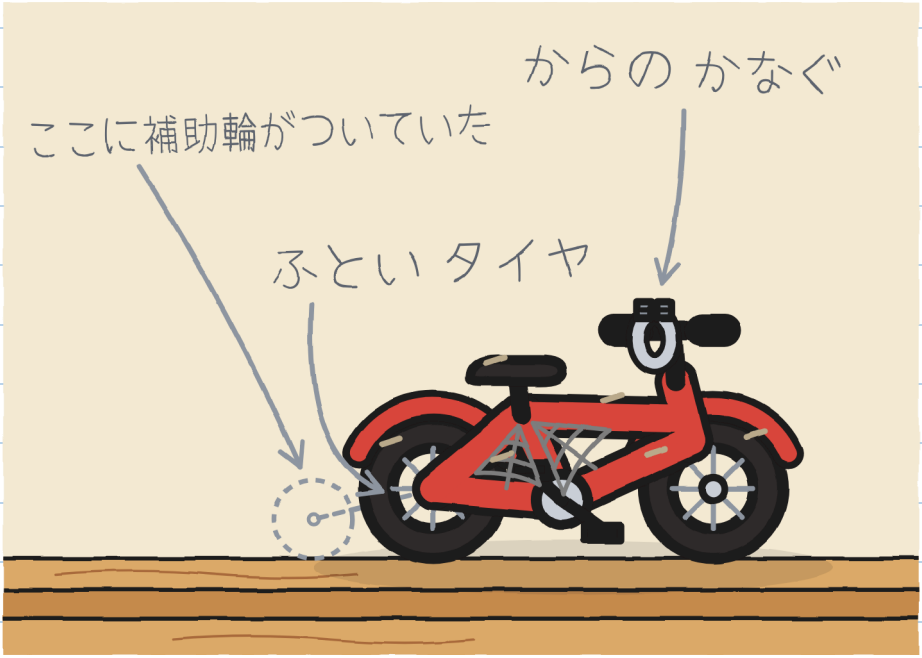


トニョは二回読んだ。

「ひどい字だな」と言った。それきり、しばらく何も言わなかった。

R.は約束をおそく守る。フローラがそう言った。どれくらいおそいか、とは言わなかったけど。 —J.

それからトニョは小さな自転車をつくえの上にのせた。

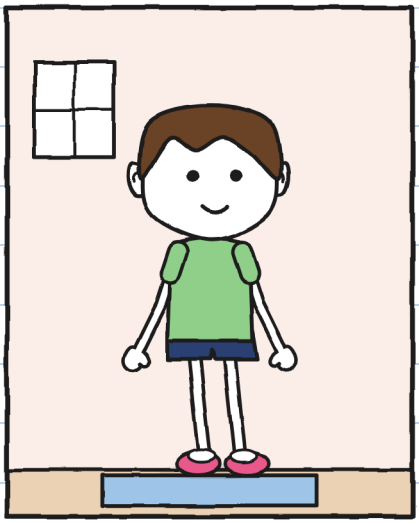


「ぼくのだった。このベルが、金具でついていた。ある日、ベルが鳴らなくなった：カチッ。だれかが言ったんだ。『かしてごらん、トニョちゃん。なおして返してあげるから』」

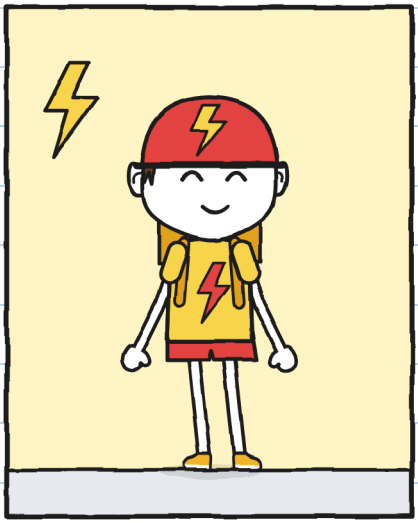
「だれが？」とフリータはつい聞いてしまって、口をおさえた。

「顔はおぼえてない。ベルはおぼえてる。それと、ずいぶん待ったことも」

「うちでは今もトニョちゃんとよばれてる」とトニョは言った。「イナズマ便ではちがう。イナズマ便ではトニョだ。最初の日に、自分でカードに書いた」
「トニョちゃんの何がいけないの？」とぼくは聞いた。
「何も。ゾーイが言うまではな。イナズマ便ではあだなは取れない。ブルーノを見ろ」



うちでは：トニョちゃん



イナズマびんでは：トニョ

「かようびからブルーノはぼくをトニョちゃんと6かいよんだ」とトニョはつけくわえた。
フリータはすみでちいさくなった。

「まだのれる？」とフリータが聞いた。聞かずにはいられなかったのだ。
マラさんが自転車をゆかにおろした。トニョはすわった。



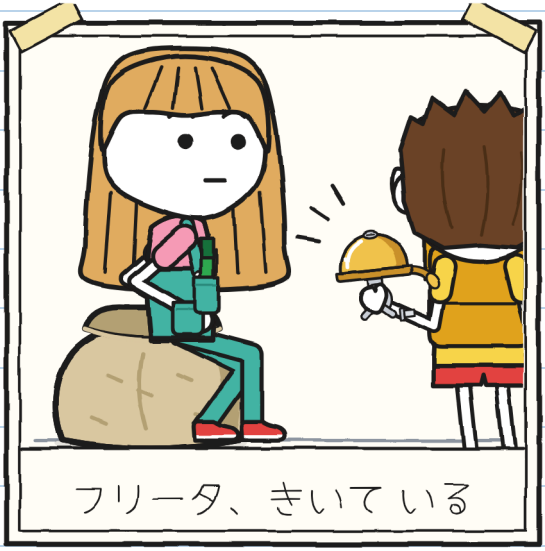
のれた。まあ、なんとか。
マラさんが音をたてた。笑い声みたいだった。トニョも笑った。土曜日から、トニョが笑うのを見ていなかった。

あかメーター：0。これもちゃんと数えるから書いておく。 —J.

「今の自転車には、もうベルがついてる」とぼくは言った。「イナズマ便のだ。このベルをつける必要はない。しまっておいてもいい。もどらせてもいい」

「知ってる」とトニョは言った。でも、ぼくを見た。はじめて聞いたような顔だった。

フリータはペンをしまって、十一分だまって聞いていた。

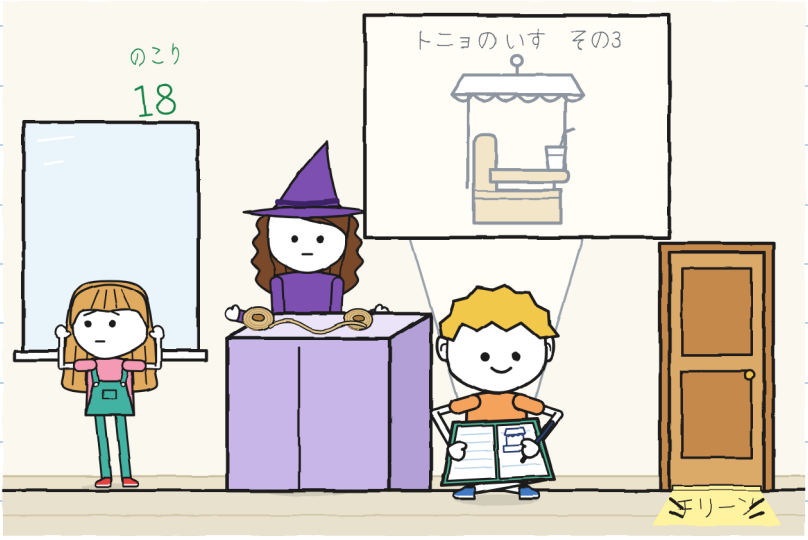




十一分。したがしびれた。 —J.

「ひとりで試したい」とトニョは言った。
マラさんとフリータとぼくは外に出た。トニョは、おくの部屋のドアをしめた。

フリータは、聞かないように店の反対側へ行った。ぼくも、聞かないように絵をかいた。トニョのいすにはもうてんがいがある。ぬのの屋根だ。それでも聞こえてしまった。



チリーン。
土曜日と同じチリーンだった。そのあと、もうひとつ。
そして、長いあいだ何も聞こえなかった。

トニョが出ていくとき、かたほうの手にベル、わきの下に箱をかかえていた。
「あしたまで持っていく。サインはしない」
「それなら、夜明けにもどるよ」とマラさんは言った。
「もどればいい。ひとばんだけ、持っていたい」
「もしトニョがベルを箱の外におくと？」とぼくは聞いた。
「やったことがない」とマラさんは言った。「朝の7時にためすつもりもない」
トニョはベルとメモを箱の中にしまった。



あしたまであと十四時間。数えておくよ。 —J.

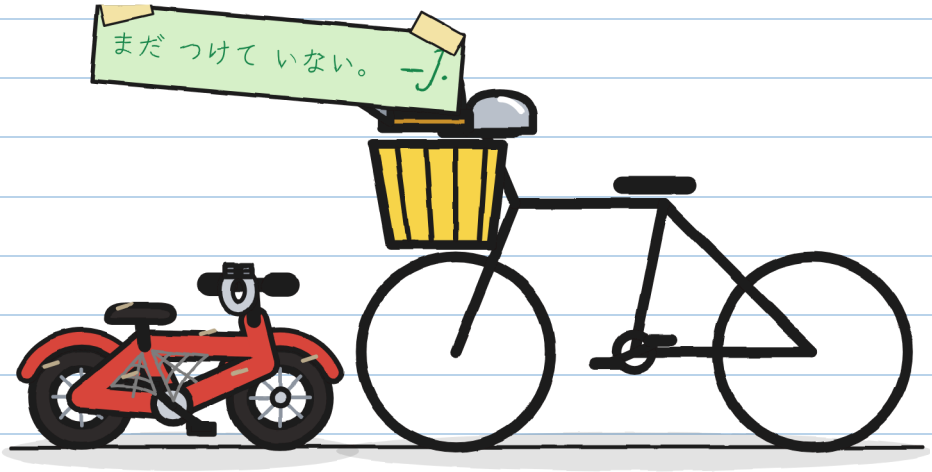
金曜日、ぼくの通りにまた音がひびいた：チリーン、チリーン、チリーン。十四回目のもどりだ。
前の夜のことは見ていない。トニョが話してくれた：



「今度は3番は、げんかんマットじゃなく、ぼくのベッドのよこの台であった。夜明けにガラスをたたきはじめたから、まどを開けてやった」

荷物にまどを開けてあげるなんて。ていねいだね。 —J.

ぼくはトニョの二つの自転車をならべてかいた。今の自転車にベルをかきたした。とてもよくにあう。
フリータは、かいたベルの上に紙切れをはった。



まえ　　いま

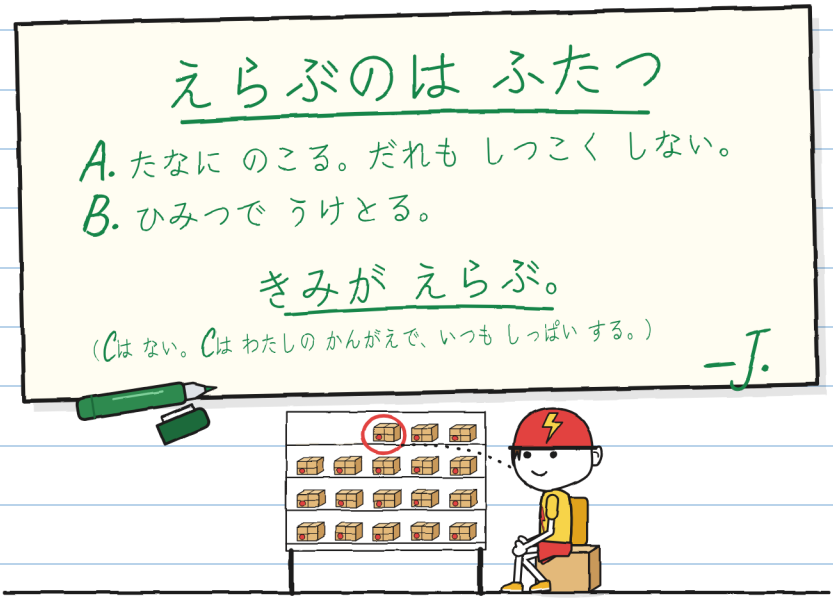
フリータの言うとおりだった。ちょっとくやしい。

第5章

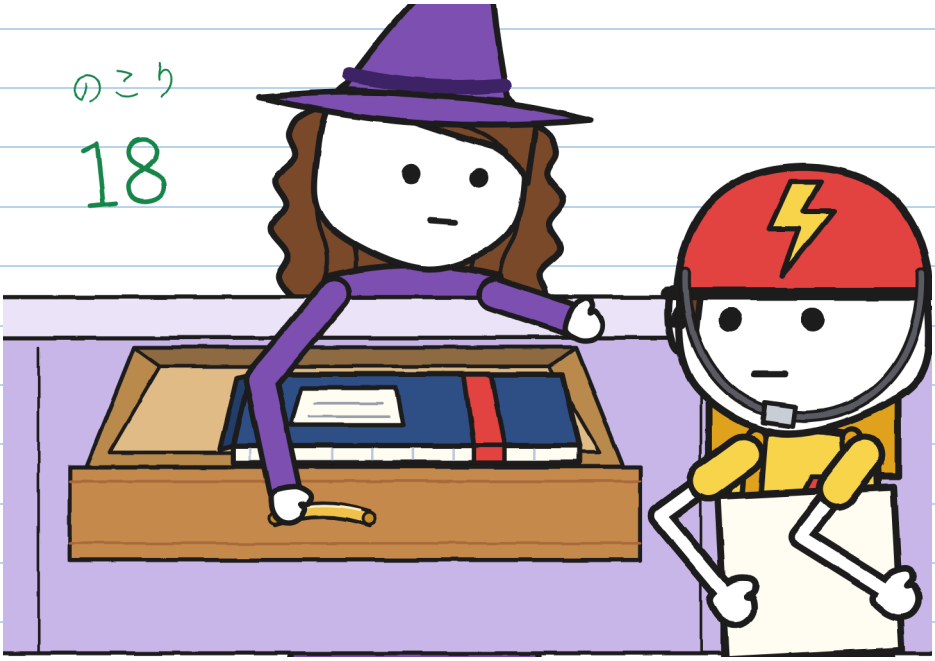
ひみつの はなし

金曜日の夕方、3番はたなの上にあった。はんこは十四こ。トニョは箱にすわって、遠くから見ていた。

フリータは二日前から何かをじゅんびしていた。また、めんどうなことになると思った。
二つえらべる紙だった。



トニョは紙を読んだ。それからマラさんを見た。
「サインしたら、だれが知る？」
「わたし。それと、わたしの記録の本。配達を書いてあるほんだ。この引き出しから出ない」
「イナズマ便には？」
「言わない。記録ははりがみじゃない」



はりがみには番号だけ。名前はひきだしの中。 —J.

トニョは箱から立ちあがった。

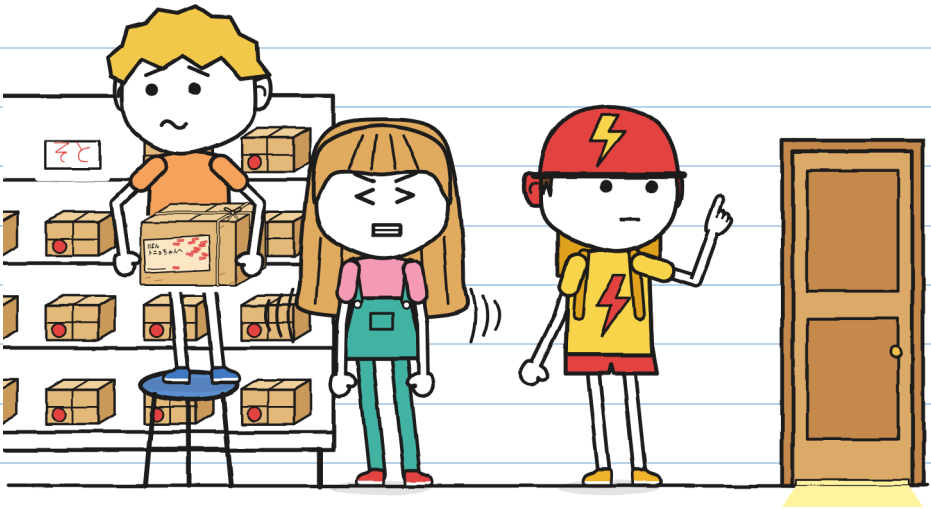
「Bにする」

フリータはとびはねなかった。とびはねないのを、ぼくは見た。

「おくの部屋で」とトニョはつづけた。「それに、きみたち二人にいてほしい」

「わたしも？」とフリータが聞いた。

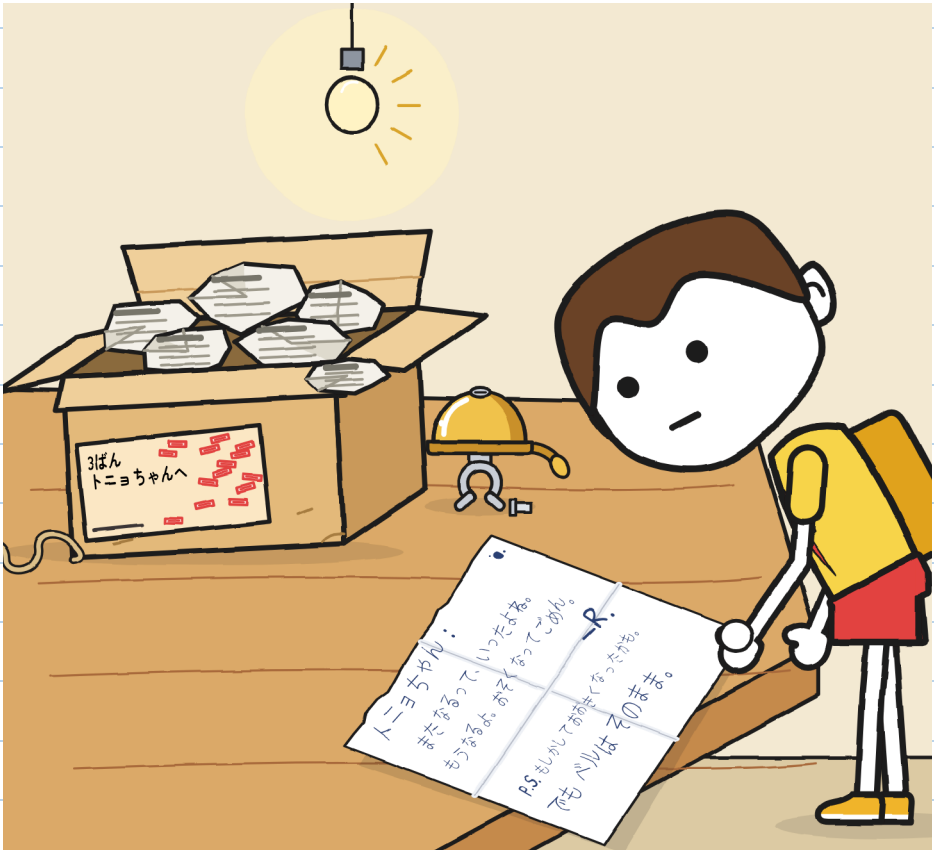
「サインを見たいのは、だれよりきみだろ。前にいてほしい」



おくの部屋で、トニョはまたベルとメモを出した。ゆっくり、とても注意して見た。

「サインする前に、何にサインするのか見る」と、だれの方も見ずに言った。

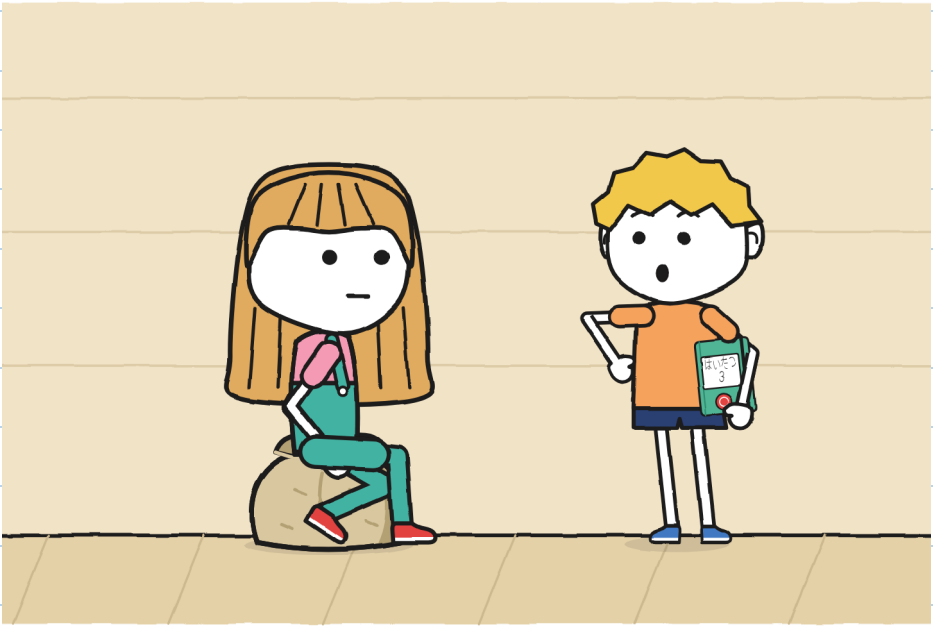
フリータはTシャツと同じ色になった。



フリータはみどりのペンをトニョにわたした。すみのふくろにすわった。

「なにしてるの？」とぼくは聞いた。

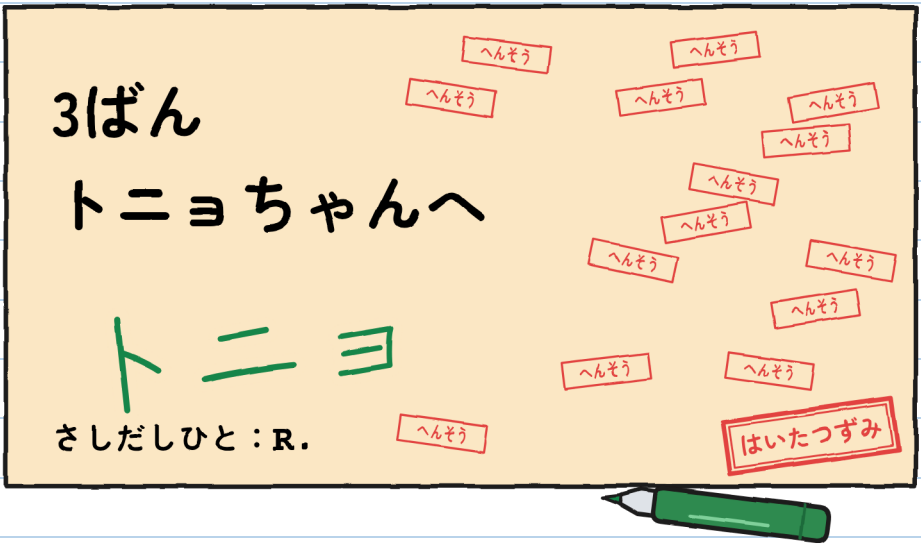
「手をおしりの下にしてすわってるの。手を出さないために」



ぼくはノートをとじて、わきにかかえた。

そのあと、グニが全部書きとめた。 —J.

トニョはペンのキャップをとって、サインした。



ラベルには「トニョちゃん」、サインは「トニョ」。
「これでいいのか？」とトニョはマラさんに聞いた。
「同じ名前じゃない」
「サインするのは、受けとる人。そして、受けとったのはあなただよ」とマラさんは言った。

マラさんは配達を記録の本に書いた。フリータはもう青いふみ台を手に持っていた。それをゆかにおいた。

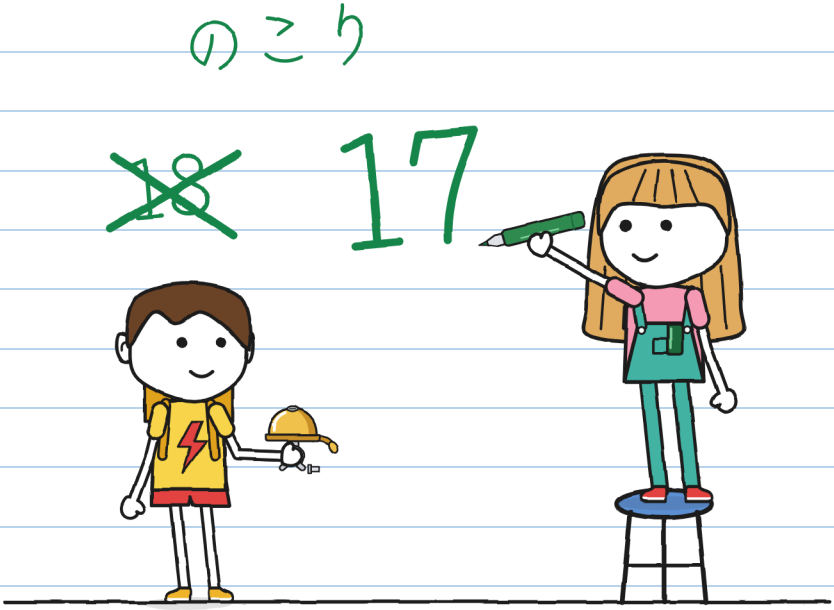
「はりがみを変えていい？」とフリータは聞いた。マラさんじゃなく、トニョに。

トニョははりがみを見た。

「数字が一つ書いてあるだけだ」

「それだけ」

「いいよ」



先に聞いたからね。覚えておいて。 —J.

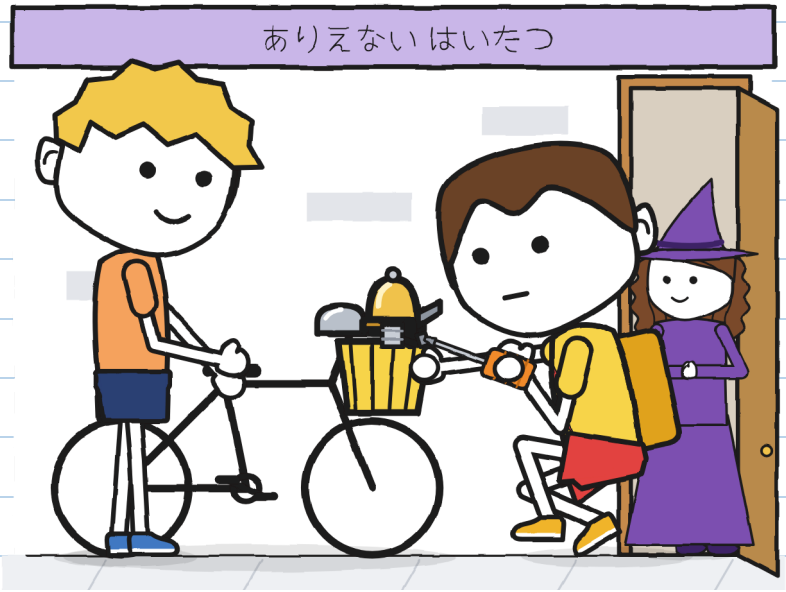
トニョは外に出て、自転車をかべにたてかけた。リュックからドライバーを出した。

「ベルをつけるの？」とぼくは聞いた。

「うん」

「イナズマ便のベルは？」

「あれはイナズマ便の。これはぼくの」



トニョがベルをつけた。ぼくは自転車をおさえただけ。トニョにたのまれたからだ。トニョは指で小さなハンマーをはじいた。

チリーン。

五時十分にイナズマ便が通った。ブルーノがブレーキをかけた。

「なんか鳴ってるな？」

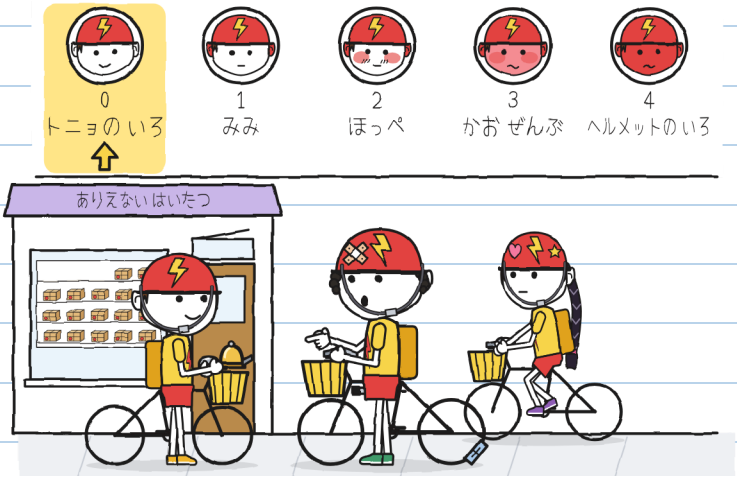
「ベルだ」

「どこの？」

「ぼくのだった」

「トニョちゃんのころの？」

ぼくはトニョの顔を見た。赤くない。耳も。



「そうよばれていたころのだ。今のぼくの名前はトニョ。きみはなんて言う？」

「パ……」ブルーノは言葉をのみこんだ。「ブルーノ」

「じゃあ、ブルーノだな」

ブルーノは頭をあげた。イナズマ便では二年、だれもかれをブルーノとよんでいなかった。

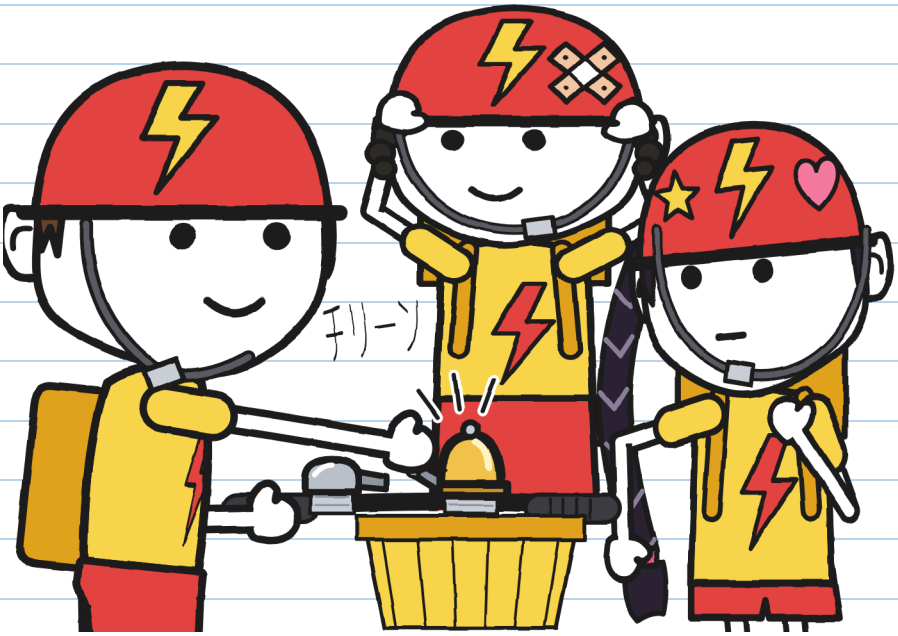
ゾーイが口をあけた。

トニョは小さなハンマーをはじいた。一回だけ。

チリーン。

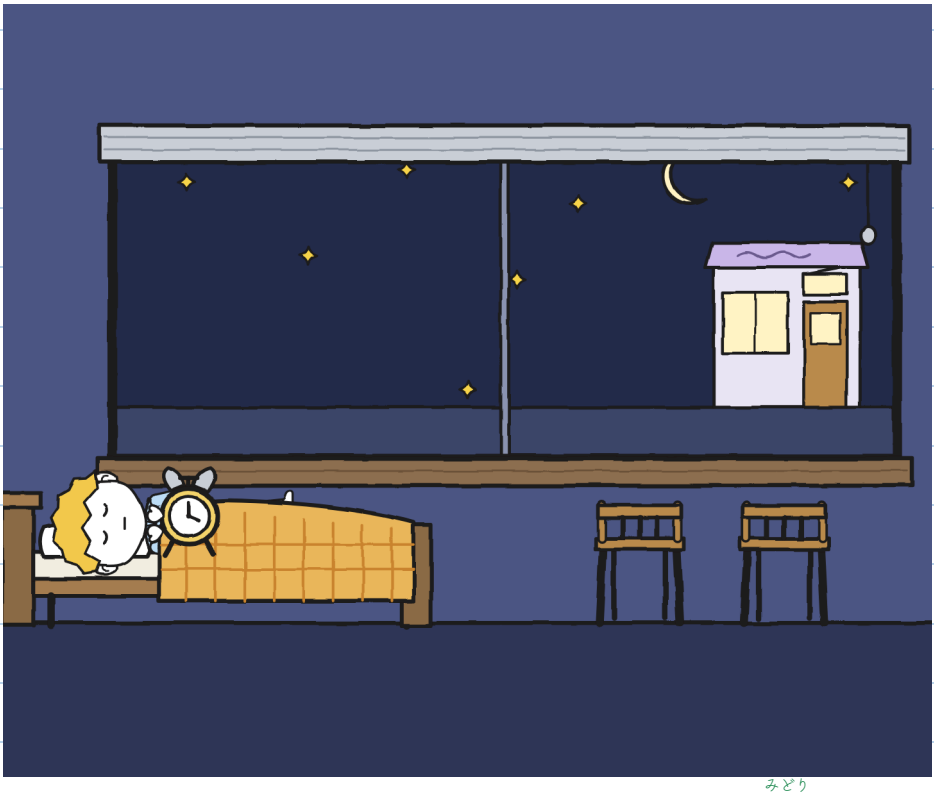
ゾーイは口をとじた。ちょっと考えた。

「いい音」とゾーイは言った。「おくれるよ、トニョ」



「トニョ」と言った。何もつけたさずに。 ーJ.

その夜、ぼくはまたブラインドをあげたままにした。
「また見はり？」とお母さんが聞いた。
「今日は、何も起こらないことを見はってるんだ」
「それは、わたしがとくいよ。さあ、ねなさい」



ペンのキャップをあけたままねてしまった。まくらが緑になった。 —J.

夜があけた。
何も鳴らなかった。
チリーンも、まどが開く音も、4番の犬も。
ぼくの通りで聞いたなかで、いちばんすてきな静けさだ。

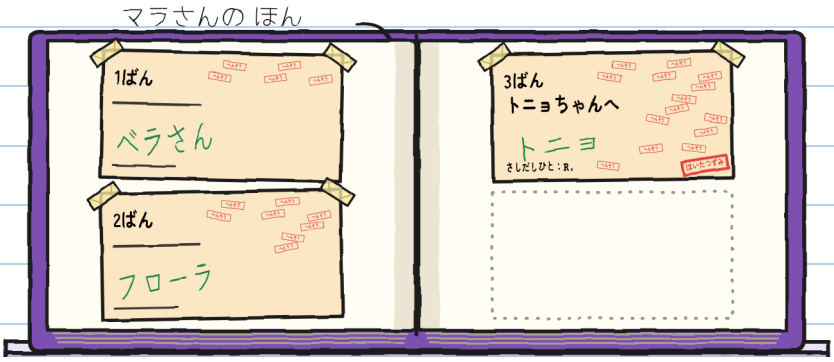


第6章

いまのところ

土曜日の十時に、たなをかいた。荷物は十七こ、空きは三つ。

マラさんはラベルを記録の本にはった。ほかの二つといっしょに。



たまご、たね、ベル。三つともおくれてとどいた。三つともとどいた。

三つめはトニョがサインした。今度は、わたしはペンをわたしただけ。 —J.

トニョは箱にすわって、もぞもぞ動いた。今度はたなを見なかった。

「いすは、まだ「いまのところ」だよ」とマラさんは言った。

「いまのところは、これでいい」とトニョは言った。

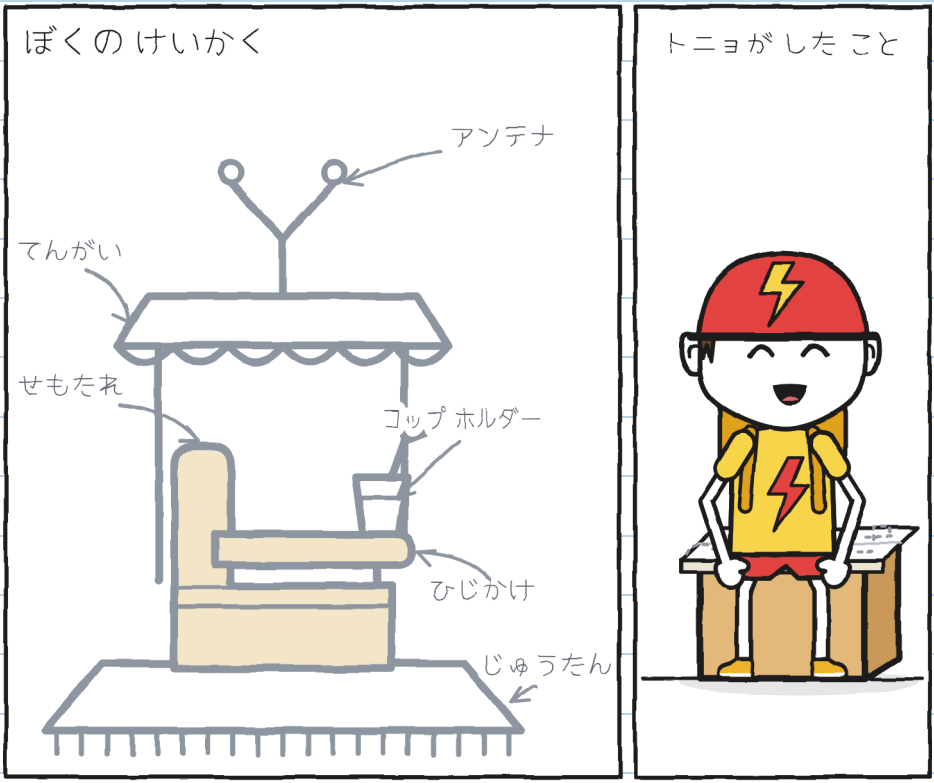
のこり

17



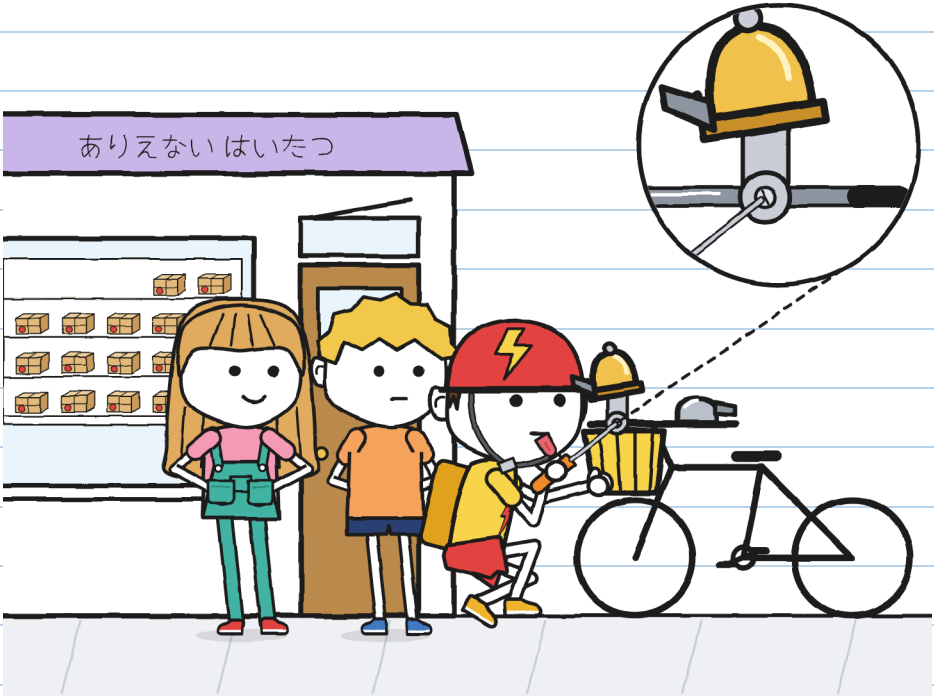
「いまのところ」は何年もつづくことがある。3番に聞いてごらん。 —J.

トニョに、トニョのいすの計画を見せた。一週間かかった。



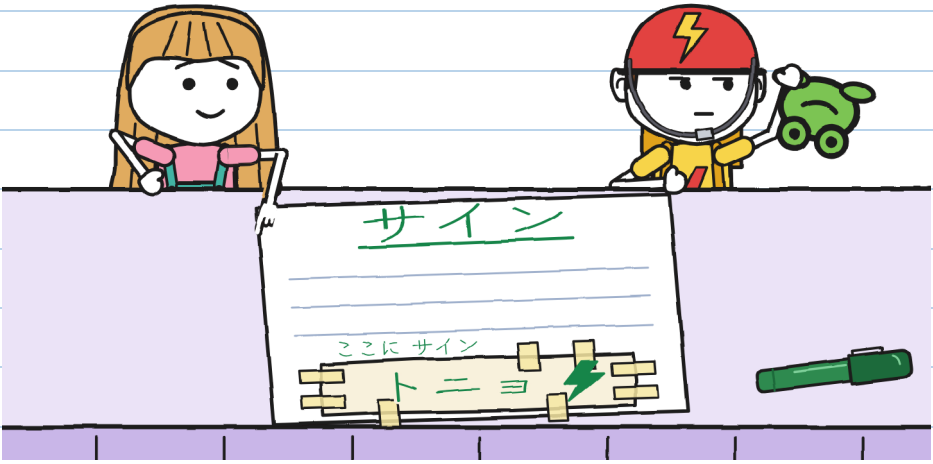
「それ、もらっていい？」とトニョは言った。
トニョは絵を四つにおった。箱の上におき、その上にすわった。

外で、ベルがハンドルになな めについていた。
「しめる間おさえてあげる」とぼくは言った。
「ひとりでできる」
トニョはできた。ぼくはそのねじを見ていた。百回まわりそうだった。



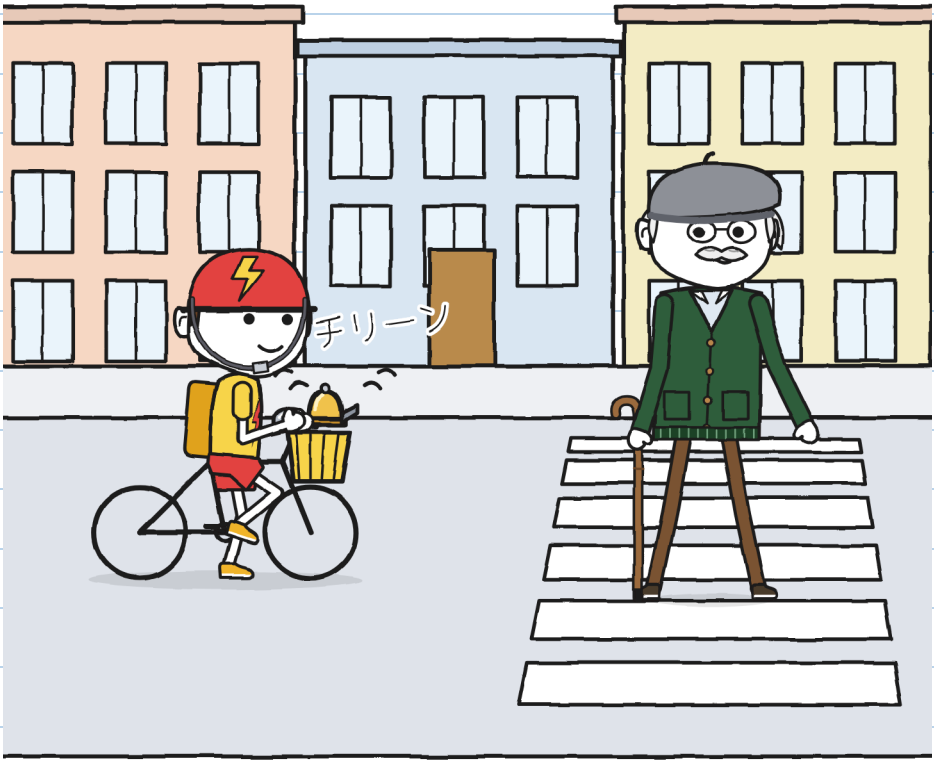
フリータはサインの紙を出した。小さなまどは、紙のふたとたくさんのテープでふさいであった。

「わなのだよ」とフリータは、マラさんが聞く前に言った。「なおした」
トニョの前に紙をおいた。
「サインをくれる？　ほんもの。下になにもないから」
トニョは紙の下を見た。カウンターの下も見た。カエルをひっくりかえした。
「いいよ」



当然だよ。 -J.

お昼、トニョははいたつに出た。つえをついたベレーぼうのおじいさんが、ゆっくりみちをわたっていた。
トニョはブレーキをかけて、まった。ベルを一かいだけならした。「ここにいるよ」というように。
チリーン。



おじいさんはつえをあげてあいさつして、自分の歩く速さで進んでいった。

「アントニオさんよ」とマラさんは言った。「わたしのリストの、トニョちゃん二番目」

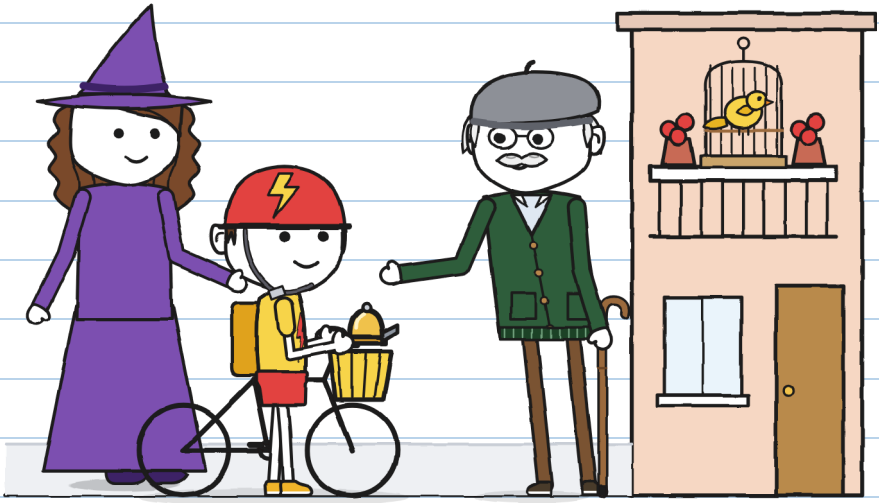
「そのベルは新しいのかい？」とおじいさんは、ぼくたちの通りに来てから聞いた。

「古いです」とトニョは言った。「ぼくのでした。トニョちゃんとよばれていたころの」

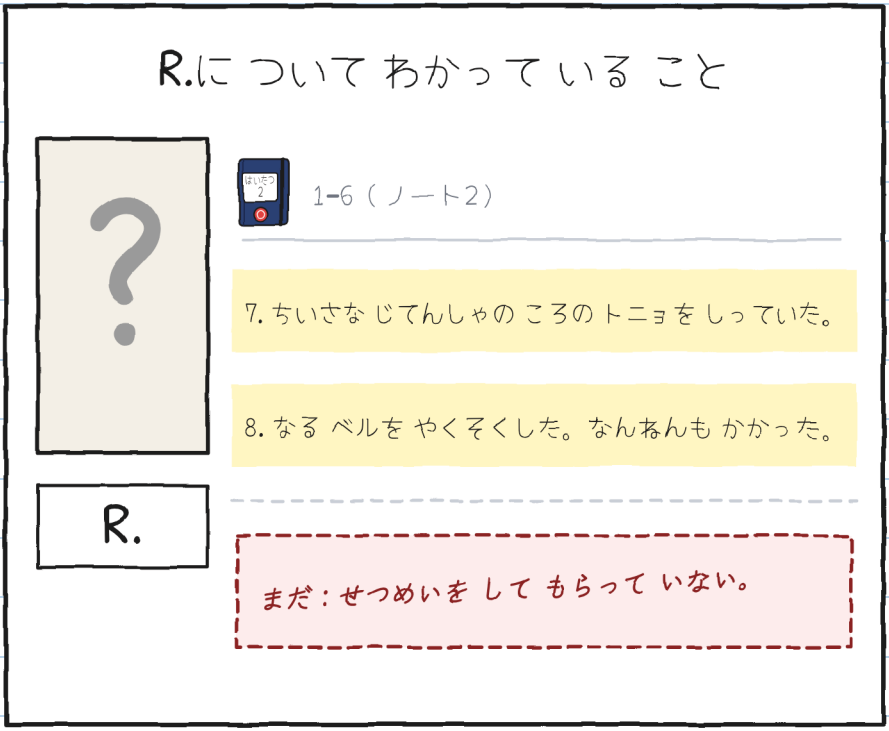
「わたしをそうよぶ人は、もう六十年いない。取りかえようか？　きみがアントニオさん、わたしがトニョちゃん」

トニョは考えた。

「いまのところ、いいえ」



ぼくはR.のカードを出した。手がかりはもう六つあった。ぼくは二つ書き足した。トニョがボールペンをかしてと言って、その下に自分の字で書いた。



「お礼は言わないの？」とフリータが聞いた。
「お礼と、もんく。両方だ。R.がだれか、わかったら」

一時にベラさんが入ってきた。パンくずをだいて、かみに小さなえだをつけていた。

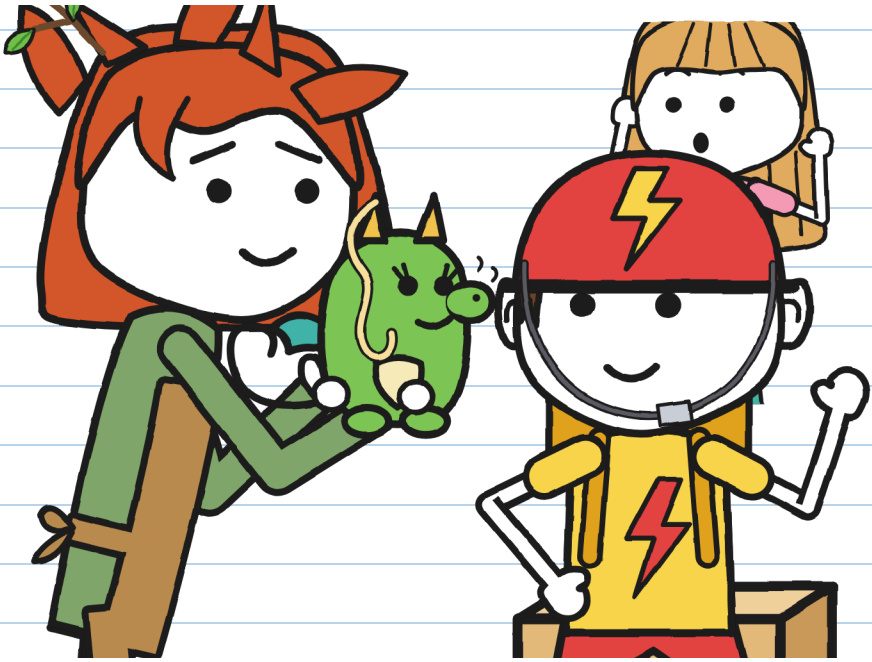
「たすけてほしいの。パンくずはもう飛べる。今は、おりるための安全な場所がいるの」ベラさんは少しだまった。「きのうは、わたしのスープをえらんだの」



パンくずはぼくを見て、ぼくの「ぼくじゃない」の顔をした。

あなたの顔、そっくり。めんもついてる。 —J.

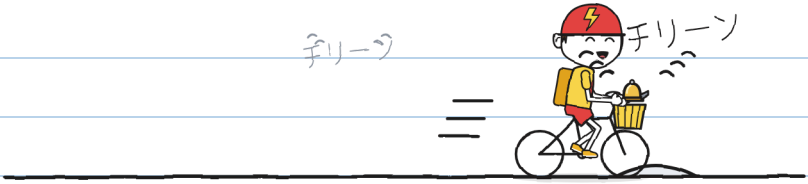
「速い人がいる？」とトニョは箱の上から聞いた。
「待てる人がいるの」とベラさんは言った。
「ぼくも待てる。今週から」



わたしも待てる。もういい？ —J.

3番の配達。それぞれがかかった時間：

	イナズマびん：10ぷん。
	R.：なんねんも。
	トニョ：むいか。
	フリータ、きいている：11ぷん（さいこうきろく）。

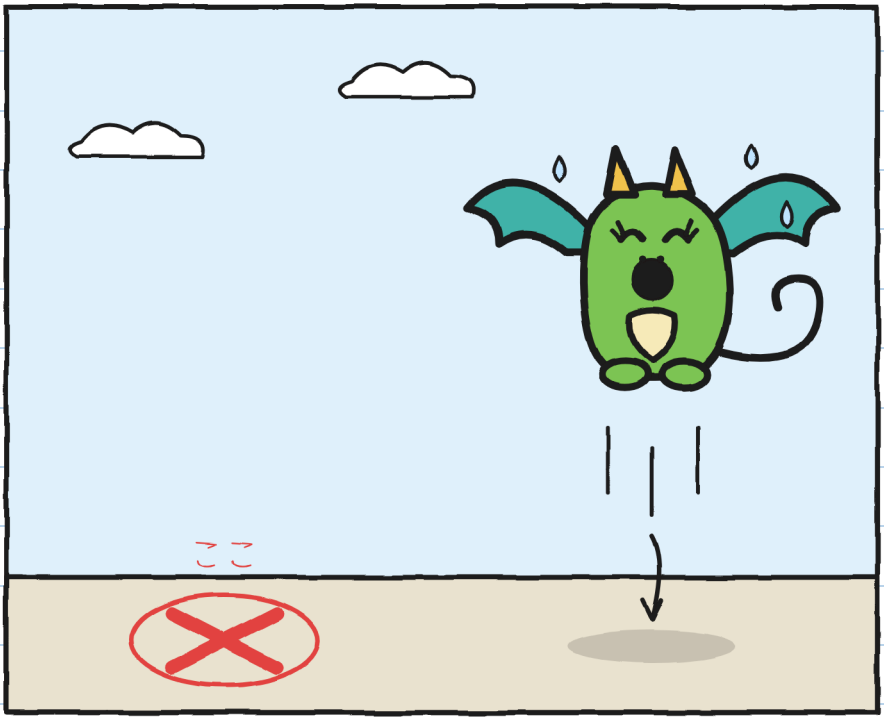


トニョは配達に出た。通りでチリーンと鳴った。もうひとつ。
今度は、トニョがベルを鳴らしていた。

わたしはまだ、ひとりで鳴っている。練習中。 —J.

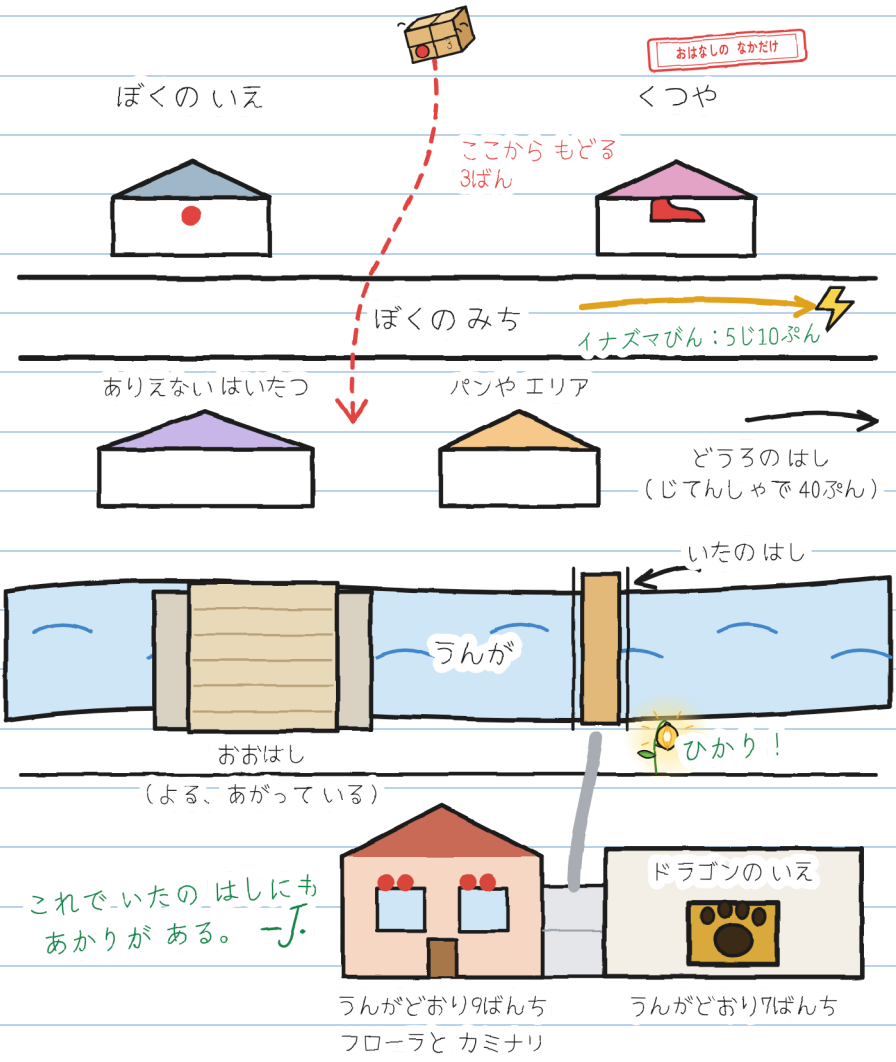
ありえない はいたつ ・4

（もうすぐ）



あなたのまねをするドラゴンの子は、どこにおりるのかな？ ―J.

まちの ちず　その3


おはなしの なかだけ
ぼくの いえ
くつや
ここから もどる
3ばん
ぼくの みち
イナズマびん：5じ10ぷん
ありえない はいたつ
パンや エリア
どうろの はし
（じてんしゃで 40ぷん）
いたの はし
うんが
ひかり！
おおはし
（よる、あがって いる）
これで いたの はしにも
あかりが ある。 -J.
ドラゴンの いえ
うんがどおり9ばんち
フローラと カミナリ
うんがどおり7ばんち

きみは なんて よばれる？

トニョは、トニョちゃんとよばれていた。今は、自分でなんとよばれるかを選ぶ。きみは？

こう よばれるのが すき……

こうも よんで いい……

こうは よばれたく ない……

わたしはフリータ。「J.」は、サインするときだけ。 —J.

ひとつの おはなし、むっつの サイズ

サイズは六つあって、3さいから16さいまで。ことばは20いじょう。**XXS**、**XS**、**S**、**M**、**L**はページも絵も同じ。**XL**はしょうせつ。ちがうのは話し方だけ。

サイズ XXS · PRE-A1
マラさんと トニョが わらう。あかい じてんしゃが みえる？

サイズ XS · A1
マラさんは わらいそうに なった。トニョも わらった。どようびから ずっと わらって いなかった。

サイズ S · A2
マラさんが ふっと おとを たてた。ほとんど わらい だった。トニョも わらった。土曜日から トニョが わらうのを 見て いなかった。

サイズ M · B1
マラさんが音をたてた。笑い声みたいだった。トニョも笑った。土曜日から、トニョが笑うのを見ていなかった。

サイズ L · B2
マラさんが、ほかの人だったら笑い声になるような音をたてた。トニョも笑った。土曜日から、トニョが笑うのを見ていなかった。

サイズ XL · B2-C1
イラスト小説 · 13+
CEFRのレベルは目安です。

じぶん　おな
それぞれ自分のサイズで。同じチリーン。 —J.

おうちの ひとと せんせいへ
linguaula.comで しょうごとに れんしゅう

本物の自転車：やること

1. ヘルメットはいつも、しっかりとめる。「すぐそこまで」のときも。
2. 見えるように、聞こえるように：ライト、明るい色の服、ベル。ベルは知らせるもの。命令するものではない。
3. 両手でハンドルをにぎる。何かに気をとられたら、安全な場所で止まる。
4. 歩道は歩く人のもの。そこでは自転車を押して歩く。道をわたる前は、止まって、見る。

「おはなしの なかだけ」のはんこは、おはなしでは起きても、道では起きないことにおす。

でかける まえに、じてんしゃを みよう

